

2010年度 事業の概要

1 調査と研究	26	研究集会	41
飛鳥・藤原京の発掘調査.....	26	科学研究費等.....	41
平城京の発掘調査.....	26	学会・研究会等の活動.....	46
企画調整部の研究活動.....	27	国が実施する事業等についての調査・協力.....	46
文化遺産部の研究活動.....	28	●平城宮跡の整備.....	46
●歴史研究室の調査と研究.....	28	●高松塚古墳の保存修復のための材料調査.....	47
●建造物研究室の調査と研究.....	28	●キトラ古墳出土遺物の調査研究.....	47
●景観研究室の調査と研究.....	29	発掘調査現地説明会・見学会	47
●遺跡整備研究室の調査と研究.....	29		
埋蔵文化財センターの研究活動	30	2 研修・指導と教育	48
●保存修復科学研究室の調査と研究.....	30	埋蔵文化財担当者研修と指導.....	48
●環境考古学研究室の調査と研究.....	30	京都大学（大学院）との連携教育.....	48
●年代学研究室の調査と研究.....	31	奈良女子大学（大学院）の連携教育.....	48
●遺跡・調査技術研究室の調査と研究.....	31		
国際学術交流	32	3 展示と公開	50
●中国社会科学院考古研究所との共同研究.....	32	飛鳥資料館の展示.....	50
●中国遼寧省文物考古研究所との共同研究.....	32	平城宮跡資料館の展示.....	50
●河南省文物考古研究所との共同研究.....	32	解説ボランティア事業.....	51
●韓国国立文化財研究所との共同研究.....	33	図書資料・データベースの公開.....	51
●西アジア諸国の文化財修復保存協力事業.....	33		
●中央アジアにおける研究協力.....	33	4 その他	52
●カンボジア APSARA との アンコール遺跡群西トップ寺院の共同研究.....	33	刊行物.....	52
海外からの主要訪問者一覧	34	人事異動.....	56
海外からの招聘者一覧	36	予算等.....	57
研究者の海外渡航一覧	37	職員一覧.....	58
公開講演会	40		
東京講演会.....	40		
第106回公開講演会.....	41		
第107回公開講演会.....	41		

1 調査と研究

飛鳥・藤原京の発掘調査

都城発掘調査部が飛鳥・藤原地区において2010年度に実施した発掘調査は、藤原宮跡で4件、藤原京跡と飛鳥地域で7件である。また、2009年度からの継続調査として、甘樫丘東麓遺跡の調査1件を実施した。以下、主な調査成果について概要を記す。

藤原宮跡では、第163次調査として朝堂院朝庭の調査を実施した。大極殿院の南に調査区を設定し、朝庭中央部の状況と造営過程の解明を主な目的とした。藤原宮期の遺構として広場SH10800の礫敷、排水のための溝等を検出した。礫敷面は後述する運河上にあたる部分では沈下した状況であった。藤原宮造成のための整地土は旧地形の起伏をならすための第一次整地と、礫敷直下の第二次整地にわけられる。第二次整地造成前の遺構としては、先行朱雀大路東側溝SD10750、藤原宮造営に関わる運河SD1901とその支流である斜行溝SD10965、第153次調査で検出した沼状遺構SX10820の続き等を検出した。運河SD1901Aは幅7.5～4.5mを測り、調査区中央を南北に貫流している。既往の調査成果とあわせると、総延長は550m以上におよぶ。沼状遺構SX10820も第153・160次調査所見と総合すると南北44m、東西38m以上の規模であることが判明した。また、第二次整地後の遺構として柱穴や東西、南北の溝を多数検出した。これらから、藤原宮造営期において従来考えられていたよりも複雑な遺構変遷をたどる状況があきらかとなった。

飛鳥地域では、第165次調査として水落遺跡を調査した。調査地は漏刻台と考えられている基壇建物SB200の北側にあたる。調査は東西2区に分けておこなった。東区で検出した主な遺構は、水落遺跡A期（斉明朝）に先行する時期では掘込地業SX4385、土器埋設遺構SX4386等があり、A期では掘込地業SX4390、小銅管、木樋暗渠、掘立柱建物SB280等がある。小銅管の据付溝SX275は調査区南端から26cmでほぼ垂直に立ち上がり、それより北に続かないことを確認した。

甘樫丘東麓遺跡では、昨年度から継続して第161次調査を実施した。調査の主目的は、谷の入口部における遺構の確認と、2009年度までの調査で検出した石垣SX100の延長部分を解明することである。調査区は3地区を設定した。谷部のA区では掘立柱列、2棟の竪穴建物などを検出した。竪穴建物の1棟は出土土器から7世紀前半と考えられる。A区下層では炭泥層と被熱した性格不明の硬化面SX202、石敷等を検出した。

尾根裾部のB区では段差の造成状況と、石敷と石組溝、焼土遺構等を検出し、尾根斜面のC区では掘立柱列を2条検出した。

国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区の整備に関わる檜隈寺周辺の調査では、丘陵頂部から西側斜面に2カ所の調査区を設定するとともに、東側斜面で試掘をおこなった。丘陵頂部（第1区）では瓦組暗渠SX920を検出した。丸瓦と平瓦を土管状に組み合わせた、谷への排水施設の端部が遺存していたものである。7世紀代の瓦を利用して後世に造られたと考えられる。西側斜面の第2区では厚い堆積土の下で溝・瓦敷等を検出し、漆付着土器や鉄滓が出土した。東側斜面の試掘箇所では石敷状遺構を検出した。

2010年度の発掘調査にともなって実施した現地説明会等は以下のとおりである。

飛鳥藤原第163次調査（藤原宮朝堂院朝庭）

現地説明会 2010年7月3日 森先一貴

飛鳥藤原第165次調査（水落遺跡）

現地見学会 2010年12月5日 庄田慎矢

平城京の発掘調査

都城発掘調査部（平城地区）において2010年度に実施した発掘調査は、平城宮で2カ所、平城京で12カ所である。以下では主な調査の概要を示すとどめ、小規模調査については『奈良文化財研究所紀要2011』にゆずる。なお、前年度調査ではあるが、2010年4月に終了した平城宮東方官衙地区の調査（第466次）では、調査区北半において築地塀で囲まれた区画それぞれで計3棟の礎石建物を検出したほか、土坑状遺構SX19400下位の黒色粘質土から木簡や木製品多数が出土する等、多くの成果があがった。

平城宮における発掘調査は、2010年4月～10月に実施した東院地区（第469次）が唯一の大規模調査である。東院地区は宮東端にある張り出し部の南半を指し、研究所ではその性格究明を目的とした重点調査を2006年度から継続している。第469次もその一環で、2009年度におこなった第446次調査区の北側において、850㎡の範囲を調査対象とした。ほぼ7カ月にわたる発掘調査の結果、調査区中央部の石組溝SD19500の南北で、掘立柱建物群を多数検出した。建物群は少なくとも6期に区分できる。

薬師寺および薬師寺休ヶ岡八幡宮境内の調査は防災施設設置工事の事前調査で、第474・476次が薬師寺境内、第475次が薬師寺休ヶ岡八幡宮境内の調査である。

第474次では東西方向に長い調査区において、池およびその堆積土を検出した。また、第476次は金堂周辺の小規模調査で、薬師寺創建期の河原石を敷き詰めた遺構のほか、室町時代の金堂倒壊時とみられる瓦の廃棄土坑等を検出した。第475次は休ヶ岡八幡宮の社殿周辺における調査で、八幡宮創建（9世紀末）以前の土地利用を部分的にあきらかにした。

第477次は春日東塔院の発掘調査で、奈良国立博物館との初の共同調査となった。調査位置は東塔院の東北隅にあたり、奈良国立博物館による昭和41年の調査成果を念頭におきつつ、L字形の調査区を設定した。調査の結果、東塔院の区画施設にともなう外側の雨落溝を検出した。また、東塔院の創建（12世紀前半）以前の遺物包含層や遺構を部分的に検出し、包含層および土坑からは11世紀後半から12世紀前半にかけての土器が出土した。

第478次は平城京左京三条一坊一・二坪の調査である。この調査は「平城宮跡展示館」建設の事前調査で、遺構面の高さや遺構の残存状況の確認が目的である。調査の結果、三条条間北小路の南北側溝と、三条一坊一坪の坪内道路南北側溝のほか、坪内道路の北側で大型の井戸1基を検出している。この井戸は上下2段構造で、上段の井戸枠は正方形、下段の井戸枠は六角形の横板組である。井戸枠内からは瓦、土師器甕や須恵器壺・甕等の土器類（墨書土器を含む）、木製品、金属製品、木簡等が出土している。

2010年4月～2011年3月の発掘調査にともなう現地説明会、現地見学会は以下のとおりである。

第466次（平城宮東方官衙地区）

現地説明会 2010年4月17日 国武 貞克

第469次（平城宮東院地区）

現地説明会 2010年7月17日 芝 康次郎

第477次調査（春日東塔院）

現地見学会 2010年12月19日 海野 聡

企画調整部の研究活動

企画調整部は、地方公共団体の埋蔵文化財発掘技術者をはじめとする文化財担当者に対する研修、研究所の調査研究成果や文化財に関する情報の発信、文化財情報の収集・発信システムの研究と情報の整備充実、国際的な文化財の調査や保護活用に関する協力・援助と学術交流あるいは研修、飛鳥資料館・平常宮跡資料館等における研究成果の展示公開と普及活動、以上のような事業を実施し、奈良文化財研究所がおこなう研

究に係るさまざまな事業についての全体的・総合的な企画とその調整、そして、事業成果の内外への情報発信や活用を担当している。

埋蔵文化財担当者研修については、年度ごとに計画を立案し、高度で専門的な研修を実施している。2010年度も、遺跡の発掘調査や整備、出土遺物や資料の分析、保存活用整理報告において、必要性が高く専門性の高い知識や方法が求められる課題に関する研修を実施した。すなわち、保存科学や報告書作成等について引き続き実施するとともに、分野を絞り込んで、年代測定法、生物環境等も取り上げた。かなり専門に特化した研修であったが、必要性の高さもあって好評であった。

文化財情報電子化の研究およびシステム構築については、「第15回遺跡GIS研究会」を開催するとともに、国内外の学会や研究会等において研究成果を公表したほか、遺跡情報・遺構情報の収集管理や活用に関する情報収集をおこない、今後のシステム構築、改良等の検討材料とした。一方、日常的には遺跡・図書・写真データベースおよび航空写真写真データの入力、航空写真フィルムのマイクロ化、ガラス乾板・大判フィルム・35mmスライドフィルムのデジタル化等を継続しておこなっている。

文化財保護に資する国際協力については、まず、ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施する研修への協力事業として、2010年9～10月に実施された集団研修「遺跡の調査・保存と活用」ではアジア太平洋地域の16カ国から16名の研修生を招き、考古学の基礎的な技術についての研修を実施した。また、11～12月にかけての、ACCUによる個人研修「文化遺産の保護に資する研修2010」では、モンゴル科学アカデミー考古学研究所から3名の研修生を招き、遺跡・遺物の記録方法や管理・活用の専門的な技術について研修を実施した。他にも、8月には東京文化財研究所と協力してモンゴルにおける石造記念物の保護に関する現地調査を、また、2011年1月にはユネスコ日本信託基金によりベトナム・ハノイにおいてタンロン皇城遺跡の発掘技術研修を、2月には文化遺産国際協力コンソーシアムと協力してミクロネシア連邦のナン・マドール遺跡の保護に関する現地調査を、それぞれ実施した。

展示公開および普及については、飛鳥資料館での関係資料の研究とその成果の展示公開、平城宮跡資料館での宮跡調査の成果の展示公開等の事業を実施した。このうち飛鳥資料館では、「キトラ古墳壁画四神」、「小さな石器の大きな物語」、「木簡黎明－飛鳥に集ういにしへの文字たち－」、「飛鳥の考古学2010」を開催した。

これらについては別項を参照されたい。平城宮跡資料館は、遷都1300年に合わせてリニューアルオープンして展示を一新するとともに、「平城宮跡 今・昔－岡田庄三写真展－」、「天平びとの声をきく－地下の正倉院・平城宮木簡のすべて」、「測る、知る、伝える－平城京と文化財－」、「発掘速報展 平城 2009・2010」を開催した。平城京遷都1300祭の開催もあり、いずれの館も入館者が非常に多かった。

文化遺産部の研究活動

文化遺産部は、歴史研究室、建造物研究室、景観研究室、遺跡整備研究室を置き、それぞれが、「書跡資料・歴史資料」、「歴史的建造物・伝統的建造物群」、「文化的景観」、「遺跡・庭園」について、専門的かつ総合的な調査研究をおこなっている。

各研究室における調査研究の成果は、文化財の指定・登録・選定やその後の保存と活用に関する方策等、国の文化財保護行政にも大きく資するものとなっている。

●歴史研究室の調査と研究

歴史研究室では、日本を代表し、世界文化遺産に登録されるような古寺社が所蔵する書跡資料・歴史資料について、奈良を中心として、継続的な調査研究をおこなっている。また、古都の旧家等に伝来した歴史資料についても調査研究をしている。

2010年度は、興福寺・薬師寺・仁和寺・東大寺・氷室神社大宮家・三仏寺や、奈良の旧家等が所蔵する書跡資料・歴史資料調査をおこなった。興福寺調査は、第108函～111函の調書を作成し、第4函・90函・91函の写真撮影をおこなった。薬師寺調査は、第45函・49函・51函～56函の調書作成と、第24函の写真撮影を継続して実施した。仁和寺調査は、御経蔵聖教第35函～41函の調書原本校正と、第33函～38函の写真撮影を実施した。

東大寺は、東大寺図書館収蔵庫第4号室収蔵の新修東大寺文書聖教の調査を、科学研究費補助金も充当して実施した。第5函・第15函の写真撮影を実施し、また第59函・61函～65函を調査して、目録データをパソコンに入力した。

石山寺については、奈良時代の知識経として著名な石山寺所蔵の大智度論について、これまでの調査の知見を「石山寺一切経「大智度論」の基礎的検討」として『石山寺資料叢書 史料篇第三』（法蔵館、2010年）

に公表した。

また鳥取県三徳山三仏寺の古文書調査を実施し、第1函・2函の調書作成・写真撮影をおこなった。

氷室神社大宮家文書については、昨年度に引き続き奈良市教育委員会との間で共同研究をおこない、未成巻文書仮第3函1巻～19巻の調書作成を実施した。

さらに、平城宮跡周辺の旧家等が所有する絵図・古文書や、明日香村の自治会が所有する典籍等について、調査・写真撮影を実施した。その成果として、明治時代の平城宮跡保存運動に関する基礎的な史料を翻刻した『明治時代平城宮跡保存運動史料集－棚田嘉十郎聞書・溝辺文四郎日記－』（奈良文化財研究所史料第87冊）を刊行した。また、近代の整備以前の平城宮跡について、その実態が窺える史料を、「整備以前の平城宮跡」と題して『奈良文化財研究所紀要2010』に報告した。

その他調査協力の依頼を受けて、滋賀県石山寺聖教調査や、文化庁依頼の醍醐寺聖教調査等に協力した。

●建造物研究室の調査と研究

建造物研究室では、歴史的建造物、伝統的建造物群および近代和風建築等に関する調査研究をおこなうことにより、わが国の文化財建造物の保存・修復・活用に資する基礎データの蓄積を継続的におこなっている。また、古代建築の今後の保存と復原に資するため、古代建築の構造・技法について再検証するための調査研究を、現存建築のみならず、修理等の際に保存された古材、発掘遺構・遺物等を研究対象として進めている。以下2010年度におこなった主な調査研究内容を紹介する。

古代建築に関する調査研究では、前年度から始まった法隆寺所蔵の古材調査を進めた。法隆寺が奈良県文化財保存事務所に委託した、昭和修理に際し再用不能と判断され、法隆寺に別途保管されている部材の整理および収納に際し、当研究所が部材の実測、写真撮影等を行い、あわせて部材に残る加工痕の調査や可能なものについては年輪年代調査、顔料調査等をおこなった。2010年度末までに金堂の旧部材約800点の調査を終了し、引き続き2011年度も調査をおこなう予定である。

受託調査として、奈良県近代和風建築総合調査、鳥根県津和野町所在の鷲原八幡宮総合調査、愛媛県松山市所在の萬翠荘調査、福井県若狭町所在の倉見屋荻野家住宅調査をおこなった。奈良県近代和風建築総合調査は奈良県が2008年からおこなっている調査の最終年度で、2010年は引き続き2次調査をおこない、報告書

を刊行した。鷲原八幡宮総合調査は文化庁の総合的文化財把握モデル事業の一環として津和野町が2008年からおこなった社寺建築調査の中で、特に価値の高い鷲原八幡宮社殿に焦点を当てて詳細調査をおこない、報告書を刊行した。萬翠荘調査は、旧松山藩主久松家の別邸の洋風建築の調査で、報告書を刊行した。倉見屋萩野家住宅調査は若狭町熊川宿伝統的建造物群保存地区内にある町家の詳細調査をおこない、報告書を刊行した。

海外との共同研究としては、中国文化遺産研究院発展研究所、韓国国立文化財研究所とともに建築文化遺産に関する共同研究をおこなっており、2009年度からは国際学術会議を開催している。2010年度は第一次大極殿復原にあわせ「古代建築の研究と復元」をテーマとして9月3・4日に奈良文化財研究所で第2回となる国際学術会議を開催し、約100名の参加者を得た。

国外調査として、奈文研が海外関係事業として実施しているカンボジア・西トップ寺院の現地調査をおこない、報告書を刊行した。また、文化庁がおこなっているベトナムの集落町並み保存に向けた国際協力の一環として、中部フエ省フォックティック村の集落調査および報告書刊行、南部ホーチミン市近郊のフーホイ村の集落調査をおこなった。

調査研究の一環として、奈文研保管資料のうち、建造物乾板写真の画像デジタル化と、文化財建造物保存修理時の復原等を主な内容とする現状変更説明資料の刊行を継続しておこなっている。2010年度に刊行した現状変更説明資料は1956～1958年分である。

この他、各地で実施されている文化財建造物保存修理事業・史跡整備事業にともなう建造物復元等について援助・助言をおこなっている。

●景観研究室の調査と研究

景観研究室では、文化的景観の体系化や保護施策、そして関連する学術研究に資する目的で、文化的景観に関する基礎的・体系的な情報の収集・発信をおこなうとともに、研究集会等を開催して情報の共有と深化をはかっている。また、四万十川流域等の事例研究を通じて保護の実践における諸問題の整理・解決に取り組んでいる。

文化的景観の基礎的・体系的な調査研究の一環として、文化的景観に関する学術および保護行政の情報・課題を共有し、議論を深める場として昨年度末に立ち上げた「文化的景観学研究会」を2回開催した。第1回は「文化的景観の概念」を、第2回は「文化的景観の整備・活用に関わる計画と諸問題」をテーマとした。

ここでの議論を踏まえつつ、一昨年度、昨年度に開催した研究集会での検討内容を受け、2010年12月16・17日に「文化的景観の持続可能性－生きた関係を継承するための整備と活用－」をテーマとして文化的景観研究集会（第3回）を開催した。また、昨年度開催した研究集会（第2回）の成果報告書を刊行した。

現地調査・研究としては、昨年度まで実施してきた四万十川流域の文化的景観に関する現地調査成果を整理・分析し、文化的景観の価値評価と保存計画の立案のあり方に関するモデルケースの提示を意図した報告書『四万十川流域文化的景観研究』を出版した。このほか、京都岡崎、佐渡相川の文化的景観に関する受託調査研究、宇治の文化的景観選定地区における伝統的家屋調査の受託研究をおこなった。

これらの現地調査や、全国の文化的景観の視察、担当者との協議を通して、特に都市に関わる文化的景観の価値評価と保存計画立案、文化的景観の整備・活用事業のあり方について、調査報告会や受託調査の成果報告書において基本的な考え方を整理し、各報告書に提言として盛り込んだ。

●遺跡整備研究室の調査と研究

遺跡整備研究室では、全国各地における遺跡の整備に関する調査と研究をおこない、その情報を収集・整理・普及するとともに、遺跡の保存と活用に関する基本的な考え方やその事例への適用を検討している。調査研究活動においては、遺跡の保存段階から、整備計画の立案、整備後の遺跡の公開・活用に至るまでの総合的過程を視野に入れて取り組んでいる。

現在、中心的に取り組んでいるのは「遺構露出展示に関する調査研究」である。具体的には、特に地下に埋蔵されていた遺構を露出展示している事例を中心として全国的な状況を網羅的に把握し、それぞれに生じている課題およびこれまでの対処に係る実績等を検証する作業を基礎として、実りある遺構露出展示のための基礎的検討をおこなうとともに、既に遺構露出展示をおこなっている事例が抱える課題への対処手法を整理し、また、これから遺構露出展示を検討する場合の指針案を提示することなどを目的としている。

今年度は、「遺構露出展示データベース」を構築するため、過年度に作成し、追補・修正した「遺構露出展示事例所在一覧（基礎調査／未定稿）」に基づき、関係機関への情報照会をおこなった。これらについては、資料収集・現地調査を踏まえつつ、管理マニュアル等の検討を含め、次年度に総括することとした。

また、遺跡整備に関わる今日的な成果と課題を広く

検討するため、『地域における遺跡の総合的マネジメント』をテーマとする研究集会を開催した。この研究集会では、近年の国内外の潮流を踏まえつつ、遺跡とその文化を育んできた《地域》を出発点として検討し、遺跡整備の分野がこれから先に取り組むべき方向性に関する理念と哲学を今日的観点から再考し、遺跡のマネジメントのあり方について検討をおこなった。

一方、もうひとつの柱である庭園に関する調査研究においては、庭園史および歴史的庭園の保存修理等について取り組んでいる。今年度は、国内外における歴史的庭園に関する情報収集等をおこない、基礎的資料の整理を進めた。あわせて、平成18年度から平安時代庭園を主題として実施してきた古代庭園に関する調査研究（第Ⅱ期）に関し、過年度の成果も踏まえつつ、外部研究者とともに検討会を開催して総括し、『平安時代庭園の研究』（学報第86冊）を刊行した。

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターの4つの研究室は、それぞれの事業計画にそって埋蔵文化財の調査技法に関する研究開発を実施するとともに、国や地方公共団体の要請に応じて、専門的な助言や協力をおこなっている。

●保存修復科学研究室の調査と研究

保存修復科学研究室では、調査研究事業として「考古資料の材質・構造の調査法及び保存・修復に関する実践的研究」ならびに「遺跡の保存・整備・活用に関する技術開発研究」を実施している。

前者においては、ガラス製品の着色技法の解明と劣化状態の診断法の確立を目的としたレーザーラマン分光分析法の応用研究、X線CT撮影による海洋出土鉄製遺物の内部構造調査、談山神社および霧島神宮の建造物塗装材料の材質分析、貧溶媒法により含侵薬剤を析出させた木材の真空凍結乾燥実験に取り組んだ。また、「古代の玉－最新の保存科学的研究の動向－」と題した研究集会を開催した。

一方、後者においては、遺構の露出展示をおこなった場合の水分移動変化および塩類による劣化を予測するための水分移動および溶質移動の推定、塩類による土質遺構の劣化を抑制するための水による溶質除去の可能性の検討、気象台の限定的な気象観測データをもとにした、屋外に位置する遺構表面からの水分浸潤量および蒸発散量の推定、ならびに土中における水分移動に関する検討に取り組んだ。

受託事業として、埋蔵文化財発掘調査に係る青銅器科学分析業務委託（長野県）、土壌水分の蒸発による史跡ガランドや古墳石室内環境の変化に関する調査（大分県）、田熊石畑遺跡武器形青銅器保存修理および保存台作成（福岡県）、宇治橋擬宝珠成分分析（伊勢神宮）の4件を実施した。連携研究としては、伝持田古墳群出土資料の考古科学的研究（辰馬考古資料館）、クスノキ製臼保存処理に関する保存科学的研究（大分県）、潤地頭給遺跡出土準構造船の真空凍結乾燥法による保存研究（福岡県）、北本市デーノタメ遺跡出土漆塗り時の保存処理に関する共同研究（埼玉県）、松平忠雄墓所出土品の保存処理に関する保存科学的研究（愛知県）、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡出土ガラスに関する保存科学的研究（福井県）、史跡千足古墳保存のための基礎調査（岡山県）の7件を実施した。また、東京国立博物館との機構内業務協力事業により、塑像（供養者頭部）の保存修理のための材質分析を実施し、塑像（菩薩頭部）の保存修理と安定台および保存箱の作製をおこなった。

国宝高松塚古墳壁画の保存修復（文化庁委託）において、壁画および漆喰の劣化原因の追究と保存修復に資するデータの集積を目的とした材料分析調査をおこなった。また、石室石材に対して、より安全に静置するための安定化支持具を製作し、取付けをおこなった。

●環境考古学研究室の調査と研究

環境考古学研究室では、環境考古学や動物考古学の調査研究を実施している。また、環境考古学に関連する国内外の発掘調査や整理、報告書作成の協力および助言をおこなっている。

今年度の発掘指導および研究は、長野県屋代遺跡（縄文）、新潟県長割遺跡（縄文）、愛知県水汲遺跡（縄文・中世）、奈良県興福寺南大門（古代）、香川県旧練兵場遺跡（弥生～中世）、大阪府池島・福万寺遺跡（中世）、大阪府上本町遺跡（古代）、長崎県カラカミ遺跡（弥生）、佐賀県東名遺跡（縄文）等の分析と報告をおこなった。長割遺跡では土壌選別作業を実施して、合計97,297点（2655.5g）の焼骨片を抽出した。分析の結果、漁撈活動では、淡水域から海水域までを漁場としており、とくに河川でサケを集中的に獲得していたことや、狩猟活動では、イノシシやニホンジカを主体として、ツキノワグマやタヌキも獲得したことを明らかにした。長割遺跡から出土した動物遺存体や古人骨は、骨が焼けて無機化したために残りやすくなったものと考えられ、貝塚が少ない日本海側において非常に重要な資料である。焼骨の生成に関して多様な要因が

想定されるため、生業だけでなく、葬制や儀礼等、縄文時代研究に大きく寄与できる資料といえる。

研究成果の発信として、人間文化研究機構の公開講演会において「考古学から探る日本の環境と食文化の多様性」、COP10（生物多様性条約第10回締約国会議）関連の国際学術ワークショップにおいて「Biodiversity and Concentration of Particular Resources during the Jomon Period, Japan」、野生生物保護学会・日本哺乳類学会の合同大会において「動物遺存体からみた完新世の生物地理—日本における考古動物学の可能性—」、弥生時代のシンポジウムにおいて「低湿地という景観と資源環境」等の講演・発表をおこなった。継続的に実施している現生動物骨格標本の収集と公開では、オオカミ、ロバ、セキショクヤケイ、トウカイハマギギ、コクチイシナギ等の希少な骨格標本を収集した。ほかにも、春から秋までの袋角の成長段階にあわせてニホンジカの頭蓋骨標本を作製した。

●年代学研究室の調査と研究

年代学研究室では考古学・建築史学・美術史学・歴史学研究に資するべく、遺跡出土品、建造物、美術工芸品など木造文化財の年輪年代測定を実施するとともに、年輪年代学の基礎研究に取り組んでいる。

考古学関連の分野では、3県下3遺跡から出土した木製遺物に対して年輪年代調査をおこなった。なかでも鳥根・西川津遺跡で弥生土器を共伴して出土したスギ材の木製品を年輪年代測定した結果、紀元前71年の年輪年代が得られた。辺材部は切除され残存しないため上限年代の情報となるが、これは今後同地方における土器様式の編年を考究する上でも重要となろう。

建築史関連では、2県下4棟の木造建造物に対して年輪年代調査をおこなった。特に、奈良・法隆寺金堂部材調査においては、文化遺産部建造物研究室等と共同で継続的に年輪年代調査を実施している。

美術史関連では、4都府県下14軀の木彫像に対して年輪年代測定調査をおこなった。なかでも、粗彫りの像が含まれる等様式的に制作年代を特定するのが難しい奈良・興喜天満神社所蔵神像群5軀をマイクロフォーカスX線CT装置を用いて非破壊年輪年代測定したことは、美術史研究上たいへん重要な意義を持つ。同神像群は2011年夏に奈良国立博物館において初めて陳列される予定であり、独立行政法人国立文化財機構内で研究所と博物館という枠を超えての横断的な共同研究が、着実に成果を伸ばしつつある事例の嚆矢と言えよう。

また、基礎研究として、年輪年代法の適用樹種拡大

に向けた調査研究にも積極的に取り組んでいる。これまでの研究の蓄積から年輪年代法適用の可能性が高いと考えられ、近世建造物に多用される国産ツガ材については、着実に研究成果を伸ばしつつあり、日本文化財学会大会においてポスター賞を受賞している。さらに、日本彫刻史上きわめて重要な位置を占めるカヤ材に対する年輪年代法の適用の可否を確かめるための調査研究にも着手した。国産カヤ材は現在安定的な供給がなされていないため、九州地方の基盤製作者等の協力を得て貴重な国有林産カヤ材資料などの提供を受けながら、年輪年代学的な検討をおこなっている。これらの基礎研究は次年度以降も継続する予定であり、ツガ・カヤの現生材および使用事例の情報を収集することで、その応用研究の成果が期待される。

●遺跡・調査技術研究室の調査と研究

遺跡・調査技術研究室は、2006年4月の機構改編により、遺跡およびその調査法の研究と文化財の調査技術の開発・応用を主要な業務とする研究室として再出発した。過去に存在した集落遺跡、測量、発掘技術、遺跡調査技術、遺物調査技術の各研究室の伝統と蓄積を継承した研究の推進を目的としている。

本年度は、遺跡およびその調査法の領域では、前年度にひきつづき、古代の寺院と官衙関連遺跡および井戸遺構の資料を収集・整理するとともに、遺跡の性格認定の指標や、発掘調査で抽出すべき基本的属性についての研究をおこなった。収集・補訂した寺院・官衙関係資料はデータベース化し、遺跡の性格や所在地、文献目録、主な遺構と遺物、建物の詳細データと、地図や遺跡全体図、建物図面等の画像データを、奈良文化財研究所のホームページ上で公開している。また、古代官衙・集落研究会の報告書『官衙と門』を刊行した。このほか、文化庁の委託を受けて、『発掘調査のてびき』（各種遺跡調査編）の作成に着手した。

一方、文化財の調査技術の領域では、測量・計測、探査を中心に活動をおこなった。測量・計測分野では、低価格の三次元レーザースキャナーによるドキュメンテーションの活用成功し、入門書籍を刊行した。また、展示企画室と協力して、平城宮跡資料館の冬季企画展『測る、知る、伝える—平城京と文化財—』を国土地理院近畿地方測量部と共催した。このほか、生駒本願寺裏山古墓群や中宮寺、檜前遺跡（いずれも奈良県）、国立博物館所蔵資料の計測、大学・地方自治体の発掘調査状況の計測、中国遼寧省の隋唐期墳墓出土資料などの三次元計測を実施した。探査分野では、台渡里遺跡、牛久城（ともに茨城県）、天良七堂遺跡、

三軒屋遺跡（ともに群馬県）、真福寺貝塚（埼玉県）、松本城（長野県）、法勝寺（京都府）、長尾山古墳（兵庫県）、平城宮、藤原宮、東大寺、春日大社、中宮寺、水落遺跡、檜前遺跡、赤田横穴（いずれも奈良県）、周防国府（山口県）、大宰府（福岡県）、鋼山製鉄所、苗代川窯（ともに鹿児島県）で地方公共団体や大学等と共同調査をおこなった。改良を加えたGPR（地中レーダー）は、東大寺東塔院や平城宮での建物等の詳細確認といった成果を生んでいる。

国際学術交流

●中国社会科学院考古研究所との共同研究

奈良文化財研究所と中国社会科学院考古研究所は日中古代都城の比較研究を主題とする研究計画を立て、5カ年にわたる漢魏洛陽城の共同発掘調査研究を進める協定を締結した。

この共同研究では、河南省洛陽市に位置する北魏洛陽城の宮城中枢部分を解明することを目標とした。中国側の事前調査では宮城の正門と太極殿をとおり中軸線上にはいくつかの建物基壇が存在していることをあきらかにしている。2008年度は宮城正門（閭闔門）の北側にある2号門址およびその周辺を発掘調査した。2009年度は2号門址の北に位置する3号建物址の調査を実施した。

2010年度春季は3号建物址の補足調査として、基壇について南北と東西方向の断ち割り調査を実施し、3号建物基壇の造営過程について知見を得た。同年秋季は宮城西南隅の発掘調査を実施した。宮城西城壁と南城壁をふくめた東西30m、南北60m、発掘面積は1,800㎡である。城壁本体とともに、隅楼と思われる基壇や、南城壁の南側を走る道路跡等を検出した。城壁の時期や構造を解明するために、南北幅4m、東西50mの試掘坑を設定して、西城壁および城壁内外の状況を把握するための調査を実施した。そのほか、多量の瓦、磚、土器、その他金属製品等が出土した。

2011年度春季は城壁についての補足調査を実施し、発掘調査は終了する。秋以降は、報告書作成のための出土遺物整理作業をおこなう予定である。

●中国遼寧省文物考古研究所との共同研究

遼寧省文物考古研究所との共同研究は、2006年度から朝陽市隋唐墓出土副葬遺物の調査・整理・研究をおこなってきた。2010年度は5カ年計画の最終年度にあたり、これまでの調査成果の取りまとめと次期5カ年

共同研究計画の策定を実施した。

まず、6月21日から23日の3日間、研究員2名を派遣して瀋陽市の遼寧省文物考古研究所において、調査成果の取りまとめ方法と次期共同研究計画について協議した。文物考古研究所では、5月に新所長が着任されたばかりであったが、協議は問題なく進めることができた。この協議に基づいて、調査研究報告書・論集の作成・編集作業に着手した。また、同じく次期共同研究計画書等を作成し、「日中共同研究申請書」を中国国家文物局に提出した。

このほか、12月には華玉冰副所長ほか3名を招聘し平城宮大極殿の整備状況等を視察した。3月には遼寧省文化庁の丁輝副庁長、李向東所長、呂学明副所長の3名を招聘し、平城宮跡の整備状況や水落遺跡の発掘調査状況、飛鳥藤原地区の出土品等整理保管状況、さらに奈良・京都等の社寺建築等を視察して学術交流を深めた。また、3月の招聘時に学術講演会を実施して、李向東所長には「遼寧地区における遼代塔の特徴」、呂学明副所長には「劉について－卷鋒大刀説－」と題してお話し頂いた。

●中国河南省文物考古研究所との共同研究

2010年度は、新たに締結した第Ⅲ期5カ年計画の最初の年度にあたる。第Ⅲ期5カ年計画は、発掘調査を行わず、出土品の整理研究と報告書の刊行を主とするものである。河南省文物考古研究所が調査した鞏義市黄冶窯および白河窯の調査研究を中心とするものの、河南省内のほかの遺跡等の出土品を対象に加えて、これまでの成果を基により総合的な調査研究を実施することを企図している。2010年9月に5名、2011年3月には3名の研究員を中国に派遣し、鞏義市水地河・白河地区出土の唐三彩、北朝白釉、青釉などの陶磁器を調査した。

現在中国では、唐三彩を焼成した窯は河北省（邢窯）、河南省（鞏義窯）と、陝西省（黄堡窯、醴泉坊窯の2箇所）で知られている。先に記したように第Ⅲ期5カ年計画は日本出土の唐三彩に関連した諸問題を広く総合的に検討することを目的の一つとしており、そのため9月の訪中時には陝西省まで足を延ばし、関連資料の調査をおこなった。今回は、銅川市黄堡窯と西安市醴泉坊窯出土遺物の調査をすることができた。鞏義窯産の唐三彩との異動に関して詳細な観察をおこない、その結果、特に醴泉坊窯出土品はその形態や技術的側面まで類似する点があることを改めて確認することができ、非常に有意義な成果があがった。

また、10月には中国側から5名が来日し、学術講演

会を開催するとともに、日本国内の関連資料を調査した。

なお、『鞏義白河窯考古新発見』図録の日本語版は、その作成に向けての基礎的作業を行い、2011年度に刊行の予定である。

●韓国国立文化財研究所との共同研究

2005年12月より大韓民国国立文化財研究所との間で、「日本の古代都城並びに韓国古代王京の形成と発展過程に関する共同研究」を実施している。2010年度はその第二期3ヵ年の最終年度にあたる。昨年度までの共同研究による成果を日韓双方の参加者が論考にまとめ、2010年12月に韓国語版である『韓日文化財論集Ⅱ』を、2011年3月に日本語版である『日韓文化財論集Ⅱ』を刊行した。

2006年度より開始した国立慶州文化財研究所との発掘調査交流では、奈良文化財研究所より研究員1名を派遣し、新羅王京遺跡・四天王寺址・チョクセム遺跡において共同発掘調査を実施した。派遣期間は約1ヵ月であった。国立慶州文化財研究所からは1名の研究員を受け入れ、藤原宮跡および平城宮跡において共同発掘調査を実施した。あわせて奈良を中心に都城遺跡・古代寺院遺跡等の視察を実施した。受け入れ期間は約1.5ヵ月であった。また、次期の共同研究にむけた協約更新協議および関連資料調査のための派遣1件を実施した。

●西アジア諸国等の文化財修復保存協力事業

アフガニスタン、イラクならびに周辺諸国を対象として文化遺産保存修復協力にかかわる事業を東京文化財研究所と共同で実施している。

バーミヤーン遺跡の現地調査では、7月9日から7月30日まで、東大仏西側の石窟群における調査、シャフリ・ゾハック遺跡における予備調査、これまでの調査で出土した遺物の整理作業をおこなった。アフガン人の考古学専門家に対する研修は、奈文研においては10月4日から11月28日まで、発掘調査法、測量、遺構実測および出土遺物の整理法、実測等をおこなった。

イラク人専門家に対する研修は、11月8日に保存修復専門家3名に対し金鍍金された遺物のクリーニング法と水浸出土木材の保存処理について解説した。

●中央アジアにおける研究協力

中央アジア諸国では、シルクロードの世界遺産登録を目指す動きがあり、研究者の世代交代が進む中で、文化財の登録や資料の保存のために遺跡の総合的な記

述、発掘調査、整備・活用に関心が高まっている。日本の高度で精密な遺跡調査技術に対する期待は大きく、2010年度はカザフスタンにおいて5月7日から5月15日に遺跡探査の予備調査をおこなった。カザフ国立大学では10月に収蔵資料の調査をおこない2011年2月26日に奈良文化財研究所との間で研究協力に関する覚書を交わした。タジキスタン国立古物博物館においても6月と10月に収蔵資料の調査をおこなった。

●カンボジアAPSARAとのアンコール遺跡群西トップ寺院の共同研究

考古班は5月、8月、12月に現地調査を行い、東テラスの変遷を明らかにすることができた。建築班は5月と8月に調査を行い、祠堂群の詳細な調査と、類例調査をおこなった。保存科学班は11月に調査をおこない、サンプル石材への樹脂含浸作業等をおこなった。年度末には若手研究者の招聘をおこなうとともに、報告書を刊行した。

- '10.9.12~9.22/ベトナム社会主義共和国ドンナイ省フーホイ村・フエ省フクテック村の集落調査および類例調査/他機関負担
- 海野 聡:ベトナム社会主義共和国/'10.9.12~9.23/ベトナム社会主義共和国ドンナイ省フーホイ村・フエ省フクテック村の集落調査および類例調査/他機関負担
- 深澤 芳樹:中華人民共和国/'10.9.10~9.17/河南省・陝西省における唐三彩ならびに関連資料の調査/運営費交付金
- 小田 裕樹:中華人民共和国/'10.9.10~9.18/河南省・陝西省における唐三彩ならびに関連資料の調査/運営費交付金
- 高妻 洋成:モンゴル国/'10.8.17~8.28/アラシャーン・ハダ、セルベンハールガー両遺跡における石造文化財の保存のための現地調査/東京文化財研究所
- 田村 朋美:モンゴル国/'10.8.17~8.28/アラシャーン・ハダ、セルベンハールガー両遺跡における石造文化財の保存のための現地調査/東京文化財研究所
- 加藤 真二:ロシア連邦/'10.9.16~9.27/科学研究費補助金による国際シンポジウム出席と研究発表/科研費
- 玉田 芳英:中華人民共和国/'10.9.10~9.18/河南省・陝西省における唐三彩ならびに関連資料の調査/運営費交付金
- 松本 将一郎:ベトナム社会主義共和国/'10.9.12~9.23/ベトナム社会主義共和国ドンナイ省フーホイ村・フエ省フクテック村の集落調査および類例調査/他機関負担
- 田村 朋美:大韓民国/'10.9.1~9.3/大韓民国出土ガラス製遺物の調査および情報収集/科研費
- 石村 智:フィジー/'10.8.31~9.6/フィジーにおける考古学的遺跡の踏査/科研費
- 降幡 順子:中華人民共和国/'10.9.10~9.18/河南省・陝西省における唐三彩ならびに関連資料の調査/運営費交付金
- 森先 一貴:ロシア連邦/'10.9.18~9.25/国際シンポジウム「北東アジアの大陸および島嶼地域における人類の初期居住について」への参加、および研究発表/科研費
- 丹羽 崇史:中華人民共和国/'10.9.22~9.26/The Tongling Symposium on the Bronze Civilization on 2010に参加/科研費
- 中村 亜希子:中華人民共和国/'10.9.10~9.18/河南省・陝西省における唐三彩ならびに関連資料の調査/運営費交付金
- 松井 章:大韓民国/'10.9.7~9.10/貝塚の発掘調査方法の指導と出土動物遺存体についての研究指導/先方負担
- 平澤 毅:マレーシア/'10.9.12~9.19/マラッカ及びジョージタウンの保存管理に関する現地調査等/他機関科研費
- 森本 晋:フランス/'10.9.20~9.27/国際学会「考古文化遺産に関するヴァーチャルリアリティー」に出席/運営費交付金
- 高妻 洋成:中華人民共和国/'10.9.8~9.10/日中韓共同シルクロード沿線文化財保護人材プログラム講師/東京文化財研究所
- 加藤 真二:カザフスタン・タジキスタン/'10.10.12~10.30/シルクロード地域の旧石器時代遺物の調査/文化財保護・芸術研究助成財団助成金
- 小野 健吉:大韓民国/'10.10.20~10.22/忠南大学校百済研究所主催学術会議「東アジア古代宮城の後苑」への出席と発表/先方負担
- 高妻 洋成:台湾/'10.9.17~9.20/台湾伝統建築壁画及び絵画の保存状況現地調査ならびに保存科学研究と技術の交流及び講演/先方負担
- 芝 康次郎:中華人民共和国/'10.10.21~11.2/中国社会科学院考古研究所との共同研究/運営費交付金
- 城倉 正祥:中華人民共和国/'10.10.21~12.24/中国社会科学院考古研究所との共同研究/運営費交付金
- 国武 貞克:カザフスタン・タジキスタン/'10.10.12~10.30/旧石器時代遺物を中心とする博物館収蔵考古資料の調査/運営費交付金
- 森本 晋:カザフスタン・タジキスタン/'10.10.12~10.30/旧石器時代遺物を中心とする博物館収蔵考古資料の調査/文化財保護・芸術研究助成財団助成金
- 加藤 真二:中華人民共和国/'10.12.11~12.23/科学研究費による中国細石刃石器群の調査/科研費
- 森先 一貴:ロシア連邦/'10.10.21~10.31/ロシア連邦沿海州ハサン地区におけるグヴォズデヴォ5遺跡の発掘調査/科研費
- 杉山 洋:カンボジア王国/'10.11.11~12.23/文化庁委託業務「カンボジア・ウドン遺跡およびロンヴェック遺跡等の保存に関する拠点交流事業」/委託業務経費
- 芝 康次郎:中華人民共和国/'10.12.11~12.23/科学研究費による中国細石刃石器群の調査/科研費
- 松井 章:ラオス/'10.11.2~11.11/ラオスにおける家畜、家禽の調査/科研費
- 金田 明大:カンボジア王国/'10.11.26~12.3/文化庁委託業務「カンボジア・ウドン遺跡およびロンヴェック遺跡等の保存に関する拠点交流事業」/委託業務経費
- 次山 淳:大韓民国/'10.11.19~11.21/韓国三国時代における出土貨幣および関連資料の調査/科研費
- 石田 由紀子:大韓民国/'10.11.19~11.21/韓国三国時代における出土貨幣および関連資料の調査/科研費
- 青木 敬:大韓民国/'10.11.19~11.21/韓国・扶余地域の都城関連遺跡の現地踏査および資料見学/科研費
- 小田 裕樹:大韓民国/'10.11.19~11.21/韓国・扶余地域の都城関連遺跡の現地踏査および資料見学/科研費
- 井上 幸:中華人民共和国/'10.10.29~10.31/東アジア日本語教育日本文化研究会で発表/渡航費:科研費・滞在費:私費
- 井上 和人:大韓民国/'10.12.8~12.10/国際学術会議「益山歴史遺跡地区の世界遺産的価値の糾明」に出席・講演/先方負担
- 高妻 洋成:カンボジア王国/'10.11.14~11.19/アンコール文化遺産保護に関する研究協力/運営費交付金
- 脇谷 草一郎:カンボジア王国/'10.11.14~11.19/アンコール文化遺産保護に関する研究協力/運営費交付金
- 田村 朋美:カンボジア王国/'10.11.14~11.19/アンコール文化遺産保護に関する研究協力/運営費交付金
- 高妻 洋成:大韓民国/'10.11.1~11.5/International Conference on Conservation Ethics for Rational Decision-making: Dialogue between the East and the Westにて招待講演/先方負担
- 清水 重敦:大韓民国/'10.11.2~11.4/日中韓国際シンポジウム「ソウル、北京、東京」への参加/先方負担
- 降幡 順子:カンボジア王国/'10.11.14~11.19/アンコール文化遺産保護に関する研究協力/運営費交付金
- 渡邊 晃宏:大韓民国/'10.10.26~10.30/国立羅州文化財研究所開所5周年記念国際学術大会への参加・報告/先方負担
- 田代 亜紀子:インドネシア/'10.11.20~11.28/西スマトラ州パダンにおける歴史的地区文化遺産復興支援(専門家交流)事業への協力/東京文化財研究所
- 深澤 芳樹:大韓民国/'10.11.9~11.13/国立慶州文化財研究所が主催する国際学術シンポジウム「韓国の都城」への出席/先方負担
- 諫早 直人:大韓民国/'10.11.9~11.13/国立慶州文化財研究所が主催する国際学術シンポジウム「韓国の都城」への出席/先方負担
- 森本 晋:カンボジア/'10.11.24~11.27/アンコール歴史遺跡保存開発国際調整委員会出席/運営費交付金
- 森本 晋:香港/'10.11.29~12.5/太平洋近隣友好協会年次大会「デジタルコンテンツから知識資産へ」に出席発表/科研費
- 井上 直夫:カンボジア王国/'10.12.6~12.13/アンコール文化遺産保護に関する研究協力/運営費交付金

- 岡田 愛：カンボジア王国／'10.12.6～12.13／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
- 今井 晃樹：中華人民共和国／'10.12.13～12.24／中国社会科学院考古研究所との漢魏洛陽城における共同調査への参加／運営費交付金
- 松井 章：中華人民共和国／'10.12.12～12.16／田螺山遺跡出土の動物遺存体の調査／科研費
- 高妻 洋成：ベトナム社会主義共和国／'10.11.29～12.3／タンロン皇城遺跡保存にかかる現地調査に参加／東京文化財研究所
- 脇谷 草一郎：ベトナム社会主義共和国／'10.11.29～12.3／タンロン皇城遺跡保存にかかる現地調査に参加／東京文化財研究所
- 高妻 洋成：台湾／'10.12.5～12.8／2010文化資産国際検討会にて招待講演／先方負担
- 若杉 智宏：大韓民国／'10.11.29～12.28／国立慶州文化財研究所との発掘調査交流への参加／渡航費：運営費交付金・滞在費：先方負担
- 栗山 雅夫：中華人民共和国／'10.12.13～12.24／中国社会科学院考古研究所との漢魏洛陽城における共同調査への参加／運営費交付金
- 難波 洋三：中華人民共和国／'10.12.13～12.17／中国社会科学院考古研究所との漢魏洛陽城における共同調査への参加／運営費交付金
- 箱崎 和久：中華人民共和国／'10.12.10～12.19／第一次大極殿院復元にかかる類例の調査、および中国における八角塔に関する調査・研究／運営費交付金・科研費
- 鈴木 智大：中華人民共和国／'10.12.10～12.13／第一次大極殿院復元にかかる類例の調査／運営費交付金
- 箱崎 和久：ベトナム社会主義共和国／'10.12.23～12.31／ベトナム社会主義共和国ドンナイ省フーホイ村・フエ省フクテック村の集落調査および類例調査／他機関負担
- 北山 夏希：中華人民共和国／'10.12.10～12.13／第一次大極殿院復元にかかる類例の調査／運営費交付金
- 井上 麻香：中華人民共和国／'10.12.10～12.13／第一次大極殿院復元にかかる類例の調査／運営費交付金
- 黒坂 貴裕：ベトナム社会主義共和国／'10.12.23～12.31／ベトナム社会主義共和国ドンナイ省フーホイ村・フエ省フクテック村の集落調査および類例調査／他機関負担
- 田代 亜紀子：ベトナム社会主義共和国／'10.11.29～12.3／タンロン皇城遺跡保存にかかる現地調査に参加／東京文化財研究所
- 芝 康次郎：大韓民国／'11.1.26～1.30／韓国旧石器時代遺跡出土資料の調査／科研費
- 加藤 真二：大韓民国／'11.1.26～1.30／旧石器時代遺跡出土資料の調査／科研費
- 加藤 真二：中華人民共和国／'11.3.8～3.15／南京博物院所蔵細石器、関連資料の調査／科研費
- 中村 亜希子：中華人民共和国／'11.1.9～1.16／韓代中国東北地域での出土瓦に関する調査／笹川研究助成金
- 庄田 慎矢：中華人民共和国／'11.1.9～1.16／「古代東アジアと日本の蒸し調理」にかかわる調査／三島海雲記念財団
- 森先 一貴：大韓民国／'11.1.26～1.30／旧石器時代遺跡出土資料の調査／科研費
- 清水 重敦：フランス・イタリア／'10.12.22～1.2／フランス・イタリアにおける都市景観と歴史的建造物の変容に関する調査研究／京都大学大学院研究経費
- 田代 亜紀子：インドネシア／'11.1.1～1.8／インドネシア西スマトラ州パダンにおける歴史的地区文化遺産復興支援（専門家交流）事業への協力／東京文化財研究所
- 田代 亜紀子：ベトナム社会主義共和国／'11.1.16～1.22／タンロン皇城遺跡保存への協力／東京文化財研究所
- 井上 幸：中華人民共和国／'10.12.28～12.31／資料収集／科研費
- 井上 和人：ベトナム社会主義共和国／'11.1.16～1.20／ハノイ、タンロン皇城発掘調査支援／東京文化財研究所
- 石村 智：アメリカ合衆国／'11.1.8～1.16／ビショップ博物館にてカヌー資料の調査／他機関負担
- 石村 智：ベトナム社会主義共和国／'11.1.23～1.29／タンロン皇城遺跡保存支援国際協力／東京文化財研究所
- 石村 智：フィジー／'11.1.30～2.4／平成22年度文部科学省「国際イニシアティブ」への協力／他機関負担
- 降幡 順子：イタリア／'11.1.17～1.22／日伊文化財協力事業に係わる壁画修復と活用に関するワークショップへの参加／文化庁
- 小野 健吉：アメリカ合衆国／'11.3.8～3.16／コロンビア大学との研究交流協議、セントラルパークおよびインディペンデンス国立公園の調査／運営費交付金
- 難波 洋三：カンボジア王国／'11.2.9～2.14／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
- 杉山 洋：カンボジア王国／'11.2.9～2.25／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
- 成田 聖：大韓民国／'11.2.14～2.18／日中韓共同研究に係る資料調査および研究交流協約書の協議のため／運営費交付金
- 松井 章：大韓民国／'11.2.24～2.27／貝塚の発掘調査方法の指導と出土動物遺存体についての研究指導／先方負担
- 玉田 芳英：カンボジア王国／'11.2.9～2.14／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
- 菊池 大樹：中華人民共和国／'11.2.26～3.4／王家地遺跡発掘調査資料整理／他機関科研費
- 深澤 芳樹：カンボジア王国／'11.2.9～2.14／共同研究「環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究」のための調査／他機関負担
- 田辺 征夫：カザフスタン・ウズベキスタン／'11.2.25～3.2／カザフ国立大学と奈良文化財研究所の間における研究協力合意書調印式並びに関連する行事への参加／運営費交付金
- 若杉 智宏：大韓民国／'11.2.14～2.18／日中韓共同研究に係る資料調査および研究交流協約書の協議のため／運営費交付金
- 廣瀬 覚：大韓民国／'11.2.14～2.18／日中韓共同研究に係る資料調査および研究交流協約書の協議のため／運営費交付金
- 青木 敬：大韓民国／'11.2.14～2.18／日中韓共同研究に係る資料調査および研究交流協約書の協議のため／運営費交付金
- 石橋 茂登：大韓民国／'11.2.14～2.16／日中韓共同研究に係る資料調査および研究交流協約書の協議のため／運営費交付金
- 杉山 洋：ベトナム社会主義共和国／'11.1.16～1.29／タンロン皇城遺跡保存支援国際協力／東京文化財研究所
- 深澤 芳樹：大韓民国／'11.3.15～3.19／（財）中部考古学研究所主催による「海外著名学者招聘講演会」に講師として出席／先方負担
- 庄田 慎矢：大韓民国／'11.3.15～3.19／（財）中部考古学研究所主催による「海外著名学者招聘講演会」に講師として出席／先方負担
- 森本 晋：カザフスタン・ウズベキスタン／'11.2.25～3.9／カザフ国立大学と奈良文化財研究所の間における研究協力合意書調印式並びに関連する行事への参加、および「バーミヤン専門家会議」出席ならびにアフガニスタン考古資料の調査／運営費交付金
- 青木 達司：中華人民共和国／'11.2.13～2.21／中華人民共和国の史跡・名勝・古典庭園調査／運営費交付金
- 田代 亜紀子：フランス・イギリス／'11.2.28～3.9／「バーミヤン専門家会議」出席、バーミヤン関連資料調査およびアフガニスタン考古資料の調査／運営費交付金
- 松井 章：アメリカ合衆国／'11.3.14～3.23／カリフォルニア大学パークレー校、ネブラスカ大学リンカーン校にて研究討議、資料収集／科研費

●森川 実：カザフスタン・ウズベキスタン／11.2.25～3.2／カザフ国立大学と奈良文化財研究所の間における研究協力合意書調印式並びに関連する行事への参加／運営費交付金

●国武 貞克：カザフスタン・ウズベキスタン／11.2.25～3.2／カザフ国立大学と奈良文化財研究所の間における研究協力合意書調印式並びに関連する行事への参加／運営費交付金

●田代 亜紀子：ベトナム社会主義共和国／11.2.23～2.26／タンロン皇城遺跡保存事業への協力／東京文化財研究所

●北山 夏希：大韓民国／11.2.27～3.2／第一次大極殿院復元にかかる類例の調査／運営費交付金

●井上 麻香：大韓民国／11.2.27～3.2／第一次大極殿院復元にかかる類例の調査／運営費交付金

●海野 聡：大韓民国／11.2.27～3.2／第一次大極殿院復元にかかる類例の調査／運営費交付金

●箱崎 和久：大韓民国／11.2.27～3.2／第一次大極殿院復元にかかる類例の調査／運営費交付金

●丹羽 崇史：中華人民共和国／11.3.14～3.20／河南省・陝西省における唐三彩ならびに関連資料の調査／運営費交付金

●小野 健吉：大韓民国／11.3.26～3.30／韓国における庭園等の現地調査／京都大学大学院研究経費

●石村 智：ミクロネシア連邦／11.2.17～2.24／ナンマドール遺跡保護の国際協力／文化遺産国際協力コンソーシアム

●石田 由紀子：中華人民共和国／11.3.14～3.20／河南省・陝西省における唐三彩ならびに関連資料の調査／運営費交付金

●若杉 智宏：中華人民共和国／11.3.14～3.20／河南省・陝西省における唐三彩ならびに関連資料の調査／運営費交付金

●馬場 基：中華人民共和国／11.3.13～3.18／長沙市出土木簡の調査／他機関科研費

●石村 智：中華民国・パラオ共和国／11.2.26～3.7／台湾・パラオにおける先史オーストロネシア集団関連の調査／パラオにおける戦争遺跡の調査／科研費

公開講演会

東京講演会

2010年5月15日

◆田辺 征夫：平城宮跡のむかしと今

第一次大極殿復原建物が完成し、平城宮跡会場を主会場とする平城遷都1300年祭が盛大に始まった。今日、平城宮跡は特別史

跡であり、世界遺産であり、また国営公園でもある。平城宮跡は押しも押されぬ国民の貴重な史跡として周知された。しかし、ここに至るには幕末以来の150年の研究と、明治末年からの100年におよぶ保存への努力があった。その研究と保存の歴史を振り返り、どのようにして今日の平城宮跡にたどり着いたかを語り、今日の祭典の成功を、先人たちの努力と思いの結晶であることを強調した。

◆島田 俊男：大極殿の復原

まず、平城宮跡の現況とこれまでの整備について説明し、そのなかでの大極殿復原の位置づけ、目的および方針を説明した。その上で、大極殿地区の発掘調査の成果を解説し、発掘調査から得られた大極殿に関する具体的情報は、基壇の平面規模と瓦の形式のみであることを述べた。このようななか、何を根拠に、何を参考事例として、どのような考え方で大極殿の復原設計をおこなったについて詳細に説明した。その上で、実際の施行の様子を解説し、そのなかで現代的な工法の説明をするとともに、今回の復原事業についての理解を促した。

◆馬場 基：木簡が語る平城京の時代

木簡は、編纂や書写を経ていない「生」の歴史資料である。木簡を作成し、利用し、廃棄した人々と、木簡を介して直接向かいあっている。こうした木簡の特性に注目し、木簡が使われた場面を想定し、そこから知ることができる平城京の様子を考えてみた。

浮かび上がってきた平城京は、実に活気に満ちている。そこに生きる人々も、タフに時代を生き抜いていた。その生き活きとした人々とまちの様子的一端を伝えることが出来ていれば、と思う。

2010年9月25日

◆深澤 芳樹：くれないはうつろうものぞ

演題は、万葉集に載る大伴家持の歌で、彼が富山に赴任中、部下を教え諭した時の作、上二句。法律も登場し当時の夫婦におよぶので、これはこれでなかなか興味深いのだが、色合いと色持ちを機能的に利用しているところがこの歌の魅力である。

歌には、紅花で染めたくれないと椽（つるばみ）染めとが登場する。当日は、これで染めた絹羽二重を用意し、会場で披露した。くれないは、京都の吉岡幸雄さんに染めていただいたもの。華やかで美しい。それが私が染めた椽染めは、ややムラがあるものとてもしぶい。実際の色が、きつと歌の理解を深めてくれたことでしょう。

◆難波 洋三：銅鐸 花器として生きる

銅鐸には、花器に転用されたものが50個以上ある。中国では、北宋時代に士大夫階級の間で古代の青銅器への関心が高まり、その模倣品が多く作られた。室町時代にはそれらの模倣青銅器の花器や床飾りをはじめとするさまざまな唐物が日本に輸入されて、茶の湯などで珍重される。このような風潮を受け、江戸時代には日本出土の青銅器である銅鐸が、花器に改変されるようになったと考えられる。しかし、明治になり、銅鐸の文化財としての評価が高まると、このような転用はなくなる。

◆松井 章：古代人の肉食の忌避という虚構

奈良時代といえ、聖武天皇が深く仏教に帰依し、殺生肉食をしていなかったと思っている人が多いだろう。私自身、奈良文化財研究所に入ってしばらくの間はそう思っていた。

ところが、平城京にかぎらず、古代から中近世の遺跡から出土する動物骨を調査するうち、日本人はいつの時代も、貴重な動物の肉を無駄にはしてこなかったと確信するにいたった。日本人は肉食を忌避したという建前から、実際には肉を食べながらも、都合の悪い事実は書き残さなかったと考えられる。

◆小野 健吉：日本庭園のはじまり

まず、「日本庭園」のデザイン上の特色として、①自然風景に見られるような「曲線」を基調とすること、②自然に従った材料・技法を用いること、をあげたうえで、飛鳥・奈良時代の発掘庭園の事例から、こうしたデザインが奈良時代に平城宮・京で確立したことを示した。そして、それが中国・唐の庭園デザインを基盤にしつつも日本人の底流にある美意識が投影されたものではないかとの見解を示した。さらに、浄土庭園や枯山水、茶庭などの事例をあげながら、平安時代以降、近代にいたるまでの日本庭園の展開について紹介した。

◆井上 和人：古代遷都の真実－飛鳥宮・藤原京・平城京の謎を解き明かす－

2010年は和銅3年(710)の平城京遷都から1300年目にあたる。平城京の直前の都城は、16年存続しただけの、わが国最初の大陸式都城・藤原京であった。それ以前は宮室つまり王宮だけが王権の所在地として単独で存在しており、その場所が飛鳥であった。飛鳥には630年以後、王宮が営まれるが、これは大陸で唐帝国が確立し、周辺諸国に対する征服戦争を開始したことに対応したものであった。以後の藤原京の建

設も、そして平城京遷都も、その原因は唐の軍事的圧力に対してわが国を防衛していくための切実な方策に他ならなかった。

第106回公開講演会

2010年6月12日

◆田辺所長 ミニ講演：考古学すんわ⑩
古代の食卓復元を再考してみよう

◆中川 あや：平城遷瓦一都がうつる。瓦もうつる。一

藤原宮から平城宮へ都が遷る際、建築資材も共に移動している。なかでも藤原宮の屋根瓦は、平城宮の発掘調査においてしばしば出土し、旧都の資材の活用状況や、新都の建設理念を垣間見ることのできる格好の材料である。詳細な分析の結果、平城遷都の際、藤原宮から運ばれた瓦はごく一部であったこと、藤原宮の瓦が再利用された場所は平城宮の第一次大極殿院以外の各所で、第一次大極殿院には意識的に新作の瓦が用意されたこと、再利用する際に藤原宮での使用建物は全く意識されなかったこと等が明らかになった。

◆高田 貴太：古代における日本と新羅の交流

7世紀に日本(倭)が新羅との活発な交渉を通して先進文化や諸制度を摂取した状況を考古学的な観点から検討していく必要がある。宇治市隼上り瓦窯跡4号窯にともなう軒丸瓦(A・B型式)は、新羅から渡ってきた異なる技術伝統を有する二組の工人達によって製作された可能性も考えられる。飛鳥寺禅院の所用軒丸瓦はそれぞれ独自性が高く、系譜をたどると新羅、百濟、そして中国南朝に系譜が追え、相対的に新羅的要素が色濃く認められる。7世紀の瓦資料からみると、日本(倭)と新羅は継続的に7世紀を通して交流を重ねていたことがうかがえる。その背景として、朝鮮三国の抗争の中で、折を見て倭との提携を模索する新羅の姿を認めることは許されよう。

第107回公開講演会

2010年11月13日

◆田辺所長 ミニ講演：考古学すんわ⑪
二つの第一次大極殿院復原案

◆石村 智：玄奘三蔵の見たバーミヤーン

2001年のタリバーン政権による大仏爆破と続くアフガン戦争後の文化復興に向けて、東京文化財研究所・奈良文化財研究所はアフガニスタン・バーミヤーン遺跡(ユネスコ世界遺産・危機遺産)において文化遺産保護のための支援事業を進めてきた。

バーミヤーンにはかつて壮麗な仏教王国が存在し、三蔵法師として有名な唐の玄奘もそこを訪問し、その様子を『大唐西域記』に記述している。そして近年の東文研・奈文研による現地調査の結果、玄奘の記述を裏付けるさまざまな考古学遺跡が発見されており、本発表ではそれらの紹介をおこなった。

◆浅野 啓介：西大寺食堂院跡出土木簡について

西大寺食堂院跡出土木簡の内容により、食堂院で行なわれた行事の復元を試みた。特に「伊賀栗」を拾う使いに食料支給した木簡について検討した。伊賀栗は、伊賀国の栗ではなく毬栗で、おそらく、西大寺の近くにあったであろう栗林に栗を拾いに行ったことが分かる。東大寺では秋に栗を供える行事があり、西大寺でもその毬栗を供えたものと思われる。また、平安時代の食堂作法によると、平等性を保つため僧ごとに均一な量を支給していたが、西大寺では細かな量を記した付札も多く出土しており、ここでも食料を細かく量っていたことがうかがわれる。

研究集会

◆古代官衙・集落研究会(第14回)

2010年12月10~11日

新たな事務局体制による第2回目の研究集会となる今年度は「官衙・集落と鉄」をテーマに研究集会を開催した。

研究報告は、小池伸彦「古代冶金工房と鉄・鉄器生産」、菅波正人「福岡市元岡・桑原遺跡群の概要」、小杉山大輔・曾根俊雄「鹿の子遺跡について」、鈴木瑞穂「分析からみた古代の鉄生産技術」、小田和利「集落と鉄器」、古尾谷知浩「文献史料からみた古代の鉄生産・流通と鉄製品の生産」の6本である。総合討議では製鉄に関わる工人の系譜と編成について、鉄素材の流通、集落における鉄製品の普及、国衙・郡衙の関与など多岐にわたる論点について活発な議論が交わされた。

参加者は地方公共団体・大学関係者等112名で、アンケートでは94%が有意義であったとの回答が得られた。また、この研究集会の研究報告を2011年度に刊行する予定である。

(小田 裕樹)

◆文化的景観研究集会(第3回)

2010年12月16日~17日

第3回目の文化的景観研究集会は、「文

化的景観の持続可能性」というテーマの下に、保存計画と保全行為の実践について検討する場とし、全国各地から約170名の参加を得て開催した。

文化的景観で何を守り、どういった変化であれば許容されるのかという問題に対して、今回の研究集会では、生業の継続のため維持管理作業を進展させることを基礎にしつつ、そのための整備手法や許される変化は各地域の本質的価値の置き場所により異なるという一定の答えが見出された。農山漁村でも都市域でも、文化的景観が生きているものである以上、自ら修復し、新たなしくみを生成していくための手立てが求められる。今後、各地域での実践を積み重ね、様々な地域で応用できる手法開発に取り組み必要性が強く認識された。

(恵谷 浩子)

◆遺跡整備・活用研究会(第5回)

2011年1月21日~22日

文化遺産部遺跡整備研究室が平成18年度から開催してきた「遺跡整備・活用研究会」の第5回では、『地域における遺跡の総合的マネジメント』を全体テーマとして、4本の講演の下、ディスカッションをおこなった。

講演においては、『地域と遺跡』(21日)として「地域計画における遺跡の役割と機能」と「地域文化の育成と遺跡の保存・活用」、また、『社会振興と遺産』(22日)として「地域社会における遺産の保存管理」と「地域振興の取組と遺産の包括的保全」が講演され、様々な観点・立場から地域と遺跡・遺産との関わり合いについて課題の提起や取組の方向性が示された。

ディスカッションでは、『地域文化としての遺跡・遺産』を主題として、遺跡・遺産の保護・継承に係る取組や活動を実際に進める中での地域における種々のステークホルダーの存在を踏まえ、遺跡・遺産のマネジメントのためのプロフェッションのあり方等について検討した。

(平澤 毅)

科学研究費等

◆木簡など出土文字資料釈読支援システムの高次化と総合的研究拠点データベースの構築

代表者・渡辺 晃宏 基盤研究(S) 継続

木簡解読支援システムでは、削屑の多量の出土に対応した木簡の情報を効率よく蓄積し整理するためのアノテーションツールの開発と、Mokkanshopの字体検索の高度

化に向け、墨と背景を分離する画像処理研究をおこなった。

研究拠点データベースでは、新たに約5000点の画像を蓄積した。累積文字画像数は約50000点、木簡数で約3000点に達した。また、「木簡字典」へのメタデータ付与の効率化のために、「木簡データベース」と「木簡字典」の共通入力ツールを開発した。また、墨書土器の文字の字典の開発にも着手した。

今後、文字コードからの入口「木簡字典」、画像からの入口「Mokkanshop」、この二つを中核として、さまざまな知識データベースを相互に利用できる環境を形成し、出土文字資料研究拠点データベースの構築を図る予定である。

◆ミリ波およびテラヘルツ波を用いた文化財の新たな非破壊診断技術の開発研究

代表者・高妻 洋成 基盤研究 (A) 継続

本年度は、種々の材料のテラヘルツ分光スペクトルを反射法により収集するとともに、一部古建築の彩色材料のテラヘルツ分光スペクトルを収集した。また、試作したプロトタイプの携帯型ミリ波イメージング装置を用いて、焦点距離、分解能、走査速度、侵入深さなどについて主として木材を基底材とした彩色試料に対して検討をおこなった。携帯型テラヘルツ波イメージング装置を用いたケーススタディとして、愛染堂多宝塔内陣障壁画、談山神社本殿障壁画および同神社権殿の塗装された建築部材に対する調査をおこなった。

◆東アジアにおける家畜の伝播とその展開に関する動物考古学的研究

代表者・松井 章 基盤研究 (A) 新規

11月、ラオス北部の山岳少数民族の動物利用と焼畑について現地調査をおこなった。重点課題として、ブタ、ニワトリ、イヌ等の家畜と、野生イノシシ、セキショクヤケイとの関係を観察できた。

3月、カリフォルニア大学、ネブラスカ大学を訪問し、先住民文化とその生業活動について調査をおこなった。ネブラスカ大学では、プラット川河畔の戦跡考古学の調査に参加し、植民地時代のスペインとフランス、そして先住民の戦場の探査を実施し、日本に適應する可能性を探った。

10月、生物多様性ワークショップ『COP10』において科研の成果を盛り込んだ発表をおこなった。

◆日本初期貨幣史の再構築

代表者・次山 淳 基盤研究 (B) 継続

出土銭貨をもとに、わが国の貨幣の誕生

と貨幣制度の確立過程の解明を目的とした研究。3カ年計画の最終年度となる2010年度は、研究成果の取りまとめ作業をおこなうとともに、山口県長登銅山文化交流館を会場に研究集会「古代長門の産銅と銭貨生産」を開催した。また、鑄造実験の成果報告書「古代銭貨の復元鑄造実験」を刊行した。

◆南部における廃仏毀釈後の資料動態に関する調査研究

代表者・吉川 聡 基盤研究 (B) 継続

本研究では、南都の古寺社が所蔵してきた歴史資料について、本来伝来した場所から移動した状態で現在保管されている資料群の性格を追求する。2010年度は新修東大寺文書聖教の調査を継続した。未整理文書を東大寺で調査したが、内容は、東大寺年預のもとに集積された近世文書、中世以来東大寺が権益を持っていた周防国国衙領関係の近世文書、さらに近世聖教等、多様な様相を示す。また興福寺関係文書である中村準一寄贈文書について、幕末期の日記の翻刻をおこなっている。

◆中国細石刃文化の基礎的研究—河南省靈井遺跡石器群の分析を中心として—

代表者・加藤 真二 基盤研究 (B・海外) 新規

河南省靈井遺跡出土の細石刃石器群を整理し、周辺地域の石器群と比較検討することで、その位置づけを明確化する研究。本年度は、河南、山西、北京、江蘇の市省、韓国で調査し、靈井に関しては、細石刃関連遺物の集計、観察、実測をほぼ完了した。また、17点の年代測定を実施し、ほぼ11500-11900c14年B.P.の測定値が得られた。



河南省靈井遺跡の細石核

◆青銅製祭器の生産と流通からみた弥生時代の社会変化の研究

代表者・難波 洋二 基盤研究 (C) 継続

近年、弥生時代の青銅製祭器の良好な成分分析例が増加しているが、それらの青銅器の金属原料の主要な入手先であった中国の青銅器については、精度の高い成分分析例がほとんどない。そこで、今年度は銅鑄の研究を進めるとともに漢鏡の成分分析を

おこない、弥生時代の青銅器の微量成分との比較検討等をした。

◆古代の鉛調整加工技術に関する考古学的研究

代表者・小池 伸彦 基盤研究 (C) 継続

本研究は、古代の中央官営工房における鉛調整・加工技術の究明を目的とする。2010年度は主に平城宮第70次調査出土冶金関連遺物の再検討を実施した。その結果、鉛関連遺物は検出できなかったが、金加工用坩堝を確認した。これは平城宮跡では初めての例で、飛鳥池工房例との比較検討が可能となった意義は大きい。

◆中国産木材の顕微鏡的特徴に関するデータベースの構築

代表者・伊東 隆夫 基盤研究 (C) 継続

本年度は南京林業大学の李 大綱教授を中国人協力者として招聘し、それぞれ樹種別に79種の顕微鏡的特徴の記載をおこなった。一方、通常光顕微鏡による木材三断面の写真を撮影すると同時に実体顕微鏡により木口面の写真撮影もおこなった。今後、研究代表者がこれら樹種別記載につき、標準顕微鏡標本や既往の出版物を参考にして、完成度の高い内容にする予定である。

◆古代律令国家の官衙と寺院の占地に関する比較研究

代表者・小澤 毅 基盤研究 (C) 新規

本研究は、日本の古代律令国家における官衙と寺院がいかなる場所に造営され、占地上、どのような関係を有していたかを検討し、立地面の特性とそれが果たした政治的な役割を解明することを目的としている。二年目にあたる本年度は、畿内および東海道・東山道諸国の官衙・寺院遺跡を対象として、資料の収集をおこなった。

◆発掘調査成果の総合的な機械可読化に関する研究

代表者・森本 晋 基盤研究 (C) 継続

発掘調査の記録は大きく分けると実測図、写真、文章からなる。2009年度は遺構実測図の構成要素について事例収集と分析を進めており、その成果に基づいて2010年度は遺物実測図の構成要素に取り組んだ。土器、石器といった遺物の種類ごとに記録しようとしている情報とそれを表現する手段との関係を分析している。

◆古代ガラス・釉薬から探る製作技術に関する科学的的研究

代表者・降幡 順子 基盤研究 (C) 新規

本研究は、古代ガラスおよび釉薬の材質とその物性に着目して製作技術に関する変遷を明らかにすることである。今年度は弥生時代、7世紀前半～8世紀、9世紀末～10世紀出土ガラス・鉛釉陶器の分析調査、さらに鉛ガラスの熱膨張試験および粘度試験を実施した。研究成果の一部は学術雑誌へ投稿をおこなった。

◆銅鏡にみる古代東アジアの文化交流

代表者・中川 あや 若手研究 (B) 継続

最終年度となる本年度は、平安時代出土鏡の4割を占める栃木県日光市男体山祭祀遺跡出土鏡の調査を重点的におこない、全点の実測図化・デジタルデータ化を終えた。また、日本各地で出土する平安時代鏡の調査も併せて行い、当該期の日本鏡の特徴整理をおこなった。成果の一部は「瑞花双鳥八稜鏡の出現」(『遠古登攀』)として公表した。

◆木簡の構文・文字表記パターンの解析・抽出研究

代表者・馬場 基 若手研究 (B) 継続

昨年度に引き続きフルテキストデータへのタグ付け作業を行い、さらに、その公開・分析にこぎ着けた。データの公開は、「木簡画像データベース・木簡辞典」に反映させることとした。なお、XMLデータを利用した「木簡辞典」の公開は、サーバの入れ替えなどの都合で遅れているが、システムとデータは完成している。

分析作業は、3月中旬に完成する予定であったが、東日本大震災による計画停電などにより、開発と作業を依頼していた研究チームで作業の遅れが出たため、完成はしていない。ただし、実験作業には入り、近々公表出来る見込みである。

◆古代工場の復元的比較研究—埴輪・須恵器・瓦の工房を中心に—

代表者：城倉 正祥 若手研究 (B) 継続

本研究は工具痕分析を武器として埴輪・須恵器・瓦の工房を具体的に復原し、古墳社会から律令国家成立に向けての主工業生産の発展を通時的に位置付けることを目的とする。2010年度は本研究の最終年度にあたるため、研究の総括作業をおこなった。なお、成果の一部については、『北武蔵の埴輪生産と埼玉古墳群』と題する報告書を刊行して総括した。

◆古代中世東アジアにおける八角塔・八角堂の構造と意匠に関する研究

代表者・箱崎 和久 若手研究 (B) 継続

東アジアに現存する八角木塔である、応

県木塔と安楽寺八角三重塔では、規模だけでなく構造の形式がまったく異なる。中国に現存する八角磚塔や磚身木檐塔をみると、北方のものは規模も大きく、応県木塔と組物の形式も共通し、江南の磚身木檐塔はやや規模が小さく、安楽寺八角三重塔と共通する組物形式をもつ。これらが建物規模によるのか、地域性によるのかをさらに分析する必要がある。

◆南都諸大寺の中世寺院への転成過程に関する建築史学的研究

代表者・大林 潤 若手研究 (B) 継続

本研究は、平城京の諸大寺の伽藍配置や建築の性格を対象に、建築史学的方法と、発掘調査による知見、文献資料の検討を行うことを課題とする。2010年度は、過去2年間に収集した資料の整理と、補足作業をおこなった。また、西大寺旧境内でおこなわれた発掘調査図面の集成と、西大寺関係資料の再検討をおこなった。

◆人骨に認められる刑罰痕の研究—打ち首・さらし首を例として—

代表者・橋本 裕子 若手研究 (B) 継続

中世の頭蓋骨に刀傷のある人骨資料のデータ収集を行った。神奈川県逗子市所在の名越切通遺跡周辺部の「まんだら堂やぐら群」から人骨の頭骨と環椎の一部のみが検出され、打ち首となった人骨の可能性が推測できた。頭部には孔が穿たれていることが確認でき、孔の形状から和釘を用いて孔が穿たれたことが予想できた。頭部の孔は、「さらし首」として平安物語絵詞に描かれているものと酷似していただけでなく、絵巻資料からは判断できなかった頭部への穿孔方法についても、解明の糸口になる資料となった。

◆造瓦からみた6～8世紀の日朝交渉

代表者 高田 貴太 若手研究 (B) 継続

本研究は、瓦を通して6～8世紀代における日朝交渉、特に新羅との関係を検討する。今年度は、宇治市隼上り窯産の軒丸瓦や飛鳥寺東南禪院所用と推定される軒丸瓦に認められる新羅との関係を論考としてまとめた。また、慶州地域で新たに確認された花川里瓦窯などの踏査を実施した。そして、新羅の地方の古代寺院の瓦資料を集成した。

◆オセアニア島嶼環境へのラピタ人の適応戦略を探る先史学的研究

代表者・石村 智 若手研究 (B) 継続

本研究は、オセアニアの島嶼世界に人類史上初めて拡散・適応したラピタ人の生態

を、特に動植物の資源利用および集落立地の観点から検討をおこなうものである。本年度では、フィジー諸島共和国ビチレブ島において現地調査をおこない、現在の伝統的集落における資源分布および利用実態を民族考古学的手法により調査・分析することで、ラピタ人集落における生態モデルの復元を試みた。

◆古代日韓における土木技術の系譜にかんする考古学的研究

代表者・青木 敬 若手研究 (B) 継続

本研究は、6・7世紀における古墳・寺院・都城など土木構造物の築造技術について、日韓双方の調査事例を精査し、比較検討する。2010年度は、発掘調査報告書をもとに日韓双方の事例収集と検討をおこない、古墳築造法の系譜と展開については、東北・関東前方後円墳研究会で口頭発表した。宮都関連遺跡における門遺構の特徴について『官衙と門』に紙上发表し、掘立柱建物の分析視座を『奈文研紀要2011』に紙上发表する予定である。

◆東アジアにおける矢蠟法の出現と展開に関する考古学的研究

代表者・丹羽 崇史 若手研究 (B) 継続

本研究は、主に考古遺物の検討から東アジアにおける矢蠟法技術の出現・展開過程を解明することを目的とする。

本年度は、日本国内の機関が所蔵する矢蠟法関連遺物および鑄造関連遺物の調査を進めた。1月24～27日には武漢大学歴史学院の張昌平教授を招き、張教授とともに日本国内の機関が所蔵する中国青銅器の調査を実施した。また、“TONGLING SYMPOSIUM ON BRONZE CIVILIZATION 2010” (9月23日 中華人民共和国安徽省銅陵市)、国際研究集会「アジアの高錫青銅器製作技術と地域性-」(11月20日 東京芸術大学)、アジア鑄造技術史学会2010出雲大会 (8月28・9日 鳥根県立古代出雲歴史博物館) などで研究報告をおこなった。

◆古代東アジアにおける都城と葬送地に関する考古学的研究

代表者・小田 裕樹 若手研究 (B) 継続

研究計画の二年目にあたる本年度は、韓国の扶余地域周辺の遺跡踏査をおこなったほか、国内の墳墓関連資料の調査をおこなった。また、隋・唐代の墳墓資料について、引き続き調査報告・墓誌などの文献収集・データベース化をおこなった。なお、現時点での研究成果について、口頭発表をおこない、論文として発表した。

◆校倉造りの歴史の変遷と地域特性に関する研究

代表者・黒坂 貴裕 若手研究 (B) 継続

本研究は、古代の遺跡から出土した校倉造りの建築部材について、板校倉の構法について、民家建築における校倉造りの地域特性、近代建築技術書にみる校倉造りについて、以上の研究を通じて、古代から近代までの校倉造りの構法について整理することを目的としている。2010年度は井戸枳材などに転用された校木の出土部材について、木取りについての調査をおこなった。

◆復元設計を方法とする東アジア古代建築の空間及び造形原理の解明

代表者・清水 重敦 若手研究 (B) 継続

本研究は、発掘遺構の復元設計を古代建築理解のための方法と位置付け、その設計プロセスを通じて空間と造形の形成過程を追体験することにより、古代建築の空間・造形原理に迫ろうとするものである。今年度は、昨年度より実施してきた想定新薬師寺七仏薬師金堂、平城宮朱雀門の2遺構につき、復元設計と既往の案の再考を試み、それぞれ論考にまとめた。また、飛鳥・奈良時代以降の建築技術の源流を探る意味で、縄文、弥生、古墳時代における建築技術を再検証すべく、発掘調査に基づく建物復元をおこなっている事例を現地調査するとともに、既往の復元諸研究の検証をおこなった。

◆中世日本と中国における木造建築の架構システムにおける比較研究

代表者・鈴木 智大 若手研究 (B) 継続

本研究は、木造建築の架構システムに着目し、日本と中国の比較をおこなうことで、両国、さらには、東アジアにおける木造建築の技術およびその設計論理を解明しようとするものである。本年度は、修理工事報告書および保存図から中世日本の図面の収集整理をおこなった。また、唐代～遼・金代の遺構が多く現存する中国山西省北部の古建築調査をおこなうとともに、現地の研究者との意見交換をおこなった。

◆土質遺構保存のための基礎的研究-動水勾配を利用した塩類析出透水路の開発

代表者・脇谷 草一郎 若手研究 (B) 新規

本研究は水の供給によって1) 遺構土壌の形状安定化、および2) 可溶性塩類のリーチングをおこなうことで土質遺構の安定な露出展示保存法の開発を目指すものである。

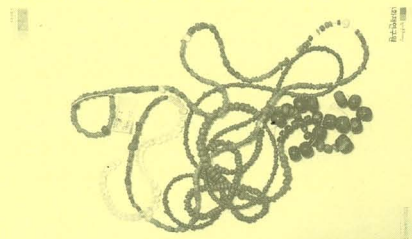
本年度は土壌カラムを作成して、水分、溶質および熱の移動について検討をおこ

なった。今後は水分・熱・溶質移動の数値解析をあわせておこない、最適な水分・熱・溶質のフラックスを与える水分の供給速度について検討をおこなう予定である。

◆東アジアにおけるインド・パシフィックビーズの材質と流通に関する科学研究

代表者・田村 朋美 若手研究 (B) 新規

本研究は日本で出土するガラス小玉について非破壊元素測定をおこない、材質と着色材の関係からその歴史の変遷について明らかにすることを目的とする。2010年度は北部九州における弥生時代のガラス小玉を中心に分析調査を実施した結果、当該時期の北部九州で流通したガラス小玉の材質的特徴について新たな知見が得られた。



韓国出土のガラス製品

◆令前木簡と古代文書の機能論的検討による日本における古代文書行政成立史の研究

代表者・山本 崇 若手研究 (B) 新規

本研究は、研究がまだ途についたばかりの令前の文書木簡を主たる対象とし、樹種をはじめとした木簡のモノに即した検討と、古文書との比較研究の成果とを踏まえつつ、日本における文書行政の成立過程を明らかにせんとするものである。初年度は、全国から出土した7世紀木簡の熟覧調査、赤外線機器を用いた再訳読、写真撮影による資料収集をすすめ、その成果の一部は2010年秋の「木簡黎明」展などで公表した。

◆日本列島における更新世終末期から完新世初頭における資源獲得行動と社会変化の研究

代表者・国武 貞克 若手研究 (B) 新規

本年度は後期旧石器時代全時期の石材資源の獲得戦略の解明を課題とした。そこで、石材原産地の時期別の利用傾向を独自の視点から分析し、成因や産状との相関を検討した。すると、時期別に有意な違いを見出すことができ、その原因を技術と居住戦略の観点から説明することができた。この概要を論文としてまとめたので今後発表する予定である。

◆九州における更新世末の移動・居住システムの変遷過程に関する研究

代表者・芝 康次郎 若手研究 (B) 新規

本研究は、九州の後期旧石器時代から縄文時代移行期の移動・居住システムについて、石器技術、石材消費の観点から究明するものである。今年度は細石刃期以前のナイフ形石器・台形石器群資料を集成し検討した。その結果、遠隔地産良質石材が拡散する細石刃石器群と比較して、近傍産石材への依存傾向を確認できた。また、比較材料として韓国の旧石器資料について現地調査もおこなった。

◆奈良時代の中央と地方における建築技術の研究

代表者・海野 聡 若手研究 (B) 新規

本研究では、発掘資料をもとにした古代建築技術の解明と文献を用いた中央、地方における造営技術者や造営体制、儀式などの建物の利用方法の解明を目的としており、本年度は、主に文献をもとに造営体制及び技術者について検討し、成果を「日本建築学会」「建築史学会」の審査付学術論文によって公開した。

◆近世建造物の年代測定を目指したツガ年輪パターンの拡充と産地推定

代表者・藤井 裕之 若手研究 (B) 新規

ツガに関する暦年標準パターンの実用化と、それに基づく木材の産地推定手法の開発を目的とした新規課題である。2010年度は近畿や四国を中心に古材等のデータ収集をすすめたほか、東北大学など他の研究機関とも連携して収集済みデータの検討をおこなった。一部の成果は日本文化財科学会で発表した。

◆木簡の字形分析による異体字の基礎的研究

代表者・井上 幸 研究活動スタート支援継続

本研究の目的は、①日本古代の木簡の筆画のあり方の把握及びこれを生成する場、位相の分析による文字使用の実態把握と文字意識の分析、②①をふまえ、実態に即した異体字研究を再構築することにある。今年度は、引き続き、木簡資料と中国の異体字研究関連の資料収集をおこない、成果として口頭発表と、文字瓦等の木簡以外の資料も用いた、筆順と異体字発生をめぐめる論文を発表した。

◆東アジアにおける古本州島後期旧石器文化の特殊性とその形成過程の研究

代表者・森先 一貴 研究活動スタート支援 継続

東アジア世界において本州以南の日本(古本州島)の旧石器文化がもつ特殊性とその背景の解明が本研究の目的である。2010年度は昨年度の資料集成に基づく隣接大陸部での資料調査とともに、書籍執筆や学会発表を通じて成果の公表に努めた。本研究により、大陸と共通した文化要素をもちながらも、異なる生態系への適応により大陸と構造差をもつ旧石器諸文化が古本州島に形成される過程の一端を示した。

◆マイクロフォーカスX線CTを用いた非破壊年輪年代法による木彫神像の研究

代表者・大河内 隆之 基盤研究(B) 継続

本研究は、マイクロフォーカスX線CT装置を用いて調査対象を非破壊で年輪年代測定する技術を木造神像彫刻の調査に応用するものである。2010年度は、奈良・興喜天満神社神像群5軀、個人蔵男神坐像3軀・女神坐像1軀等について、同装置を用いて非破壊年輪年代測定を実施した。特に、興喜天満神社神像群が年輪年代情報を含めて奈良国立博物館で初めて展示されることは、意義深いものである。また、放射性炭素年代測定法と非破壊年輪年代法を対照することで、美術彫刻作品における自然科学的年代測定法の適応対象を拡げるべく、今後に向けた新たな展開を視野に入れた基礎的研究も実施した。

◆目録学の構築と古典学の再生—天皇家公家文庫の実態復原と伝統的知識体系の解明

代表者・東京大学史料編纂所教授 田島公(渡辺 晃宏) 学術創成研究費 継続

研究支援ツールの充実の一つとして、「木簡人名データベース」の構築などを担当している。2011年2月に同データベースの研究者向け試用版を公開した。その中に構築した出土遺構年代観データベースによって、出土地点情報を作成し、木簡字典ともリンクさせた。今後『日本古代人名辞典』の増補・改訂に備えるとともに、基盤研究(S)で開発中の研究拠点データベースの支援データベースの一つとしても、データの充実を図っていく予定である。

◆考古学と人類学のコラボレーションによる縄文社会の総合的研究

代表者・島根大学法文学部准教授 山田康弘(山崎 健) 基盤研究(B)

本研究は、考古学者と人類学者が共同して発掘調査をおこない、縄文社会モデルを

構築するとともに、あるべき研究協力体制を提示することを目的としている。

初年度は、愛知県保美貝塚を発掘し、盤上集骨葬や土器棺墓などを確認することができた。また、現場の状況に合わせた土壌選別作業をおこない、焼人骨片、チップ類、動植物遺存体を回収した。

◆「日本霊異記」の文献・書誌及び歴史地理的検討による古代社会像の再構築

代表者・立命館大学文学部教授 本郷 真紹(山本 崇) 基盤研究(C) 継続

本研究は、九世紀初頭に成立した日本最古の仏教説話集である『日本霊異記』の全ての説話を対象に、文献学・書誌学的な知見を踏まえた分析と、現地調査に基づく歴史地理学・考古学的考察をおこなうことにより、古代社会の実態と構造を新たな観点から復元・再構築することを目的としている。2年目にあたる2010年度は、上巻注釈書刊行の準備、中巻説話の検討、伊豫・讃岐の古代寺院等の現地調査をおこなった。

◆都市社会構造と観光活動

代表者・立命館大学文学部准教授 三枝 暁子(浅野 啓介) 基礎研究(C) 新規

奈良の寺院、特に日本で屈指の量の資料群を誇る大乗院に関する歴史資料の収集、および解説をおこなった。未だ一部にしか過ぎないが、範囲は平安時代から近代までおよぶ。また、奈良文化財研究所がおこなった発掘調査の成果と資料の記述の対照もおこなった。

◆平安時代における須恵器生産の展開—陶邑窯を中心に—

代表者・木村 理恵 (財)高梨学術奨励基金 新規

本研究は、平安時代における須恵器の主要な生産地であった大阪府の陶邑窯跡群に焦点を当て、その生産・供給を明らかにすることを目的とする。そのための基礎作業として、陶邑窯の最終段階の窯とされるTK230-I号窯出土須恵器を再整理し、総破片数・個体数・重量などの計測、実測、写真撮影等をおこなった。今後、基礎資料を報告する予定である。

◆パラオにおける戦争の「記憶」と「遺跡」：戦争遺跡および日本統治時代の遺構の調査

代表者・石村 智 (財)高梨学術奨励基金 新規

本研究はパラオにおける第二次世界大戦の戦争遺跡および日本統治時代の遺構の現状と実態を解明することを目的とする。現

地調査では、パラオ港内に沈む旧日本軍艦船「あまつ丸」「忠洋丸」「ブイ6レック」「ヘルメットレック」の水中調査を実施し、またアンガウル島においては関連遺構(トーチカ・リン鉱石採掘所・アンガウル神社等)の調査を実施し、さらにコロール島においては旧海軍関係者・日本人居留民の墓地の調査をおこなった。



玉砕の島・アンガウルの海岸にのこされた日本軍のトーチカ遺構

◆カヤ材による日本古代木彫像の年輪年代学的研究

代表者・児島 大輔 メトロポリタン東洋美術研究センター東洋美術研究振興基金 新規

本研究は、古代の木彫像に多用されたカヤ材に対する年輪年代法の適用に向けた基礎研究をおこなうことを目的とする。現生カヤの成長パターンを調査するため、宮崎県の基盤製造業者から国産のカヤ材資料を入手し、年輪年代学的な検討をおこなっているほか、奈良時代のカヤ材製柱根等の調査をおこなった。

学会・研究会等の活動

◆埋蔵文化財写真技術研究会

2010年7月2～3日に研究会名称変更後としては第1回目（通算22回）となる総会および研究会を奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂において開催した。

7月2日：総会・研究会Ⅰ 文化財写真の実際・講演「埋蔵文化財と写真～『発掘調査のてびき』から～」（牛嶋茂氏；研究会顧問）・講演「美術工芸品と写真～仏像彫刻写真から～」（金井杜道氏；研究会顧問）・平城遷都1300年祭記念・発表「記録写真にみる平城宮第一次大極殿復原工事」（杉本和樹氏・中村一郎氏；奈良文化財研究所）

7月3日：研究会Ⅱ 写真画像の入力から出力まで・発表「写真画像を取り巻く環境の変化」[モニター・カラーマネージメントの重要性]（玉内公一氏；ティーコア）・発表「フィルムスキャンからプリント出力までの注意点」（岩本康平氏；セイコーエプソン）

1日目の研究会Ⅰでは、「文化財写真の実際」と題して、埋蔵文化財写真と美術工芸品写真の撮影に関する講演をおこなった。

2日目は、平城遷都1300年祭を記念して、中村・杉本両氏に第一次大極殿の復原工事を記録写真で紹介した。発表後はマスコットキャラクターであるせんたくくんも会場内に登場した。研究会Ⅱでは「写真画像の入力から出力まで」をテーマに、文化財写真のデジタル化に不可欠なモニターの重要性や高品質な写真プリントを得るためのカラーマネージメントについて実演を交えた発表をした。（栗山 雅夫）

◆日本遺跡学会

2010年11月20・21日の2日にわたり、平城宮跡資料館講堂で「史跡におけるアニバーサリー・イベントの意義と在り方～平城遷都1300年祭を中心として～」をテーマに大会を開催した。

1日目は、林洋氏（平城遷都1300年記念事業協会事務局長）が平城遷都1300年祭事業の全体について、また、田辺征夫氏（奈良文化財研究所長）が遷都1300年祭の意義と今後の展望について、記念講演を行った。

2日目は、史跡でのアニバーサリー・イベントの現状と課題に関する、山下信一郎氏（文化庁）の基調講演の後、3つの事例が報告された。まず、平城遷都1300年記念事業協会事務局会場安全室長の福嶋俊和氏が遷都1300年祭の会場施設整備と安全管理

について、次に、平城宮跡解説ボランティアの富安淳夫氏がボランティアから見た遷都1300年祭について、最後に、彦根市教育委員会の谷口徹氏が彦根城400年祭と以後の取り組みについて報告した。その後のパネル・ディスカッションでは、木下正史氏（東京学芸大学特任教授）をコーディネーターに、さまざまな角度からの議論がなされた。（青木 達司）

◆木簡学会研究集会

2010年12月4・5日、第32回木簡学会総会・研究集会を開催した（会場：平城宮跡資料館講堂・小講堂。参加者167名）。

4日は総会後、濱崎真二氏（下関市教育委員会）「長門鑄銭所の発掘調査と出土木簡」、井上信正氏（太宰府市教育委員会）「大宰府条坊跡第277次調査と出土木簡」、近藤滋氏（元滋賀県教育委員会）・大橋信弥氏・山本崇「北大津遺跡の調査と木簡の再釈読」の3本の出土事例報告と、末代誠仁氏（桜美林大学）「木簡釈読支援システムの開発」による奈文研の科研基盤（S）（研究代表者：渡辺晃宏）の研究報告があった。この日のみ韓国木簡学会の朱甫暎会長以下14名の方々の参加があった。

5日は、桑田訓也「2010年全国出土の木簡」で全国の出土状況を概観したあと、初めての試みとして、橋本繁氏（早稲田大学）「韓国における最近の木簡出土と研究状況」により韓国木簡の最近の発掘成果を紹介いただいた。その後、国武貞克氏（奈文研）「平城宮東方官衙の発掘調査と木簡」として、平城宮第466次調査の発掘成果と木簡の紹介があった。

なお会誌『木簡研究』第32号を編集・刊行した（担当：浅野啓介）。（渡辺 晃宏）

◆条里制・古代都市研究会

2011年3月5日・6日の両日、第27回条里制・古代都市研究会大会が、「古代官衙・寺院・道と風土記」をテーマとして奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂においておこなわれた。1日目は、小笠原好彦氏により「平城京遷都と泉津」と題した講演がおこなわれた後、大阪府の難波大道、奈良県の薩摩遺跡、群馬県の上野国新田郡衙に関する最新の調査成果が報告された。

2日目は、門井直哉氏「出雲国の烽・剗と交通路」、山路直充氏「交通から読む『常陸国風土記』」、坂江渉氏「『播磨国風土記』からみた地域間交通と道」の3本の研究報告とそれにかかわる活発な討論がおこなわれた。（山本 崇）

国が実施する事業等についての調査・協力

●平城宮跡の整備

第一次大極殿正殿の復原、および高御座の外観をイメージできる実物大模型の設置は、2009年度でほぼ終了し、2010年度には大極殿正殿を含めた完成記録の写真撮影をおこない、4月23日の完成記念式典を迎えた。2010年度は遷都1300年祭が平城宮跡をメイン会場としておこなわれたため、開催期間中は国内外の要人や研究者への対応に追われた。また、開催後には仮設建物の撤去等の旧状復旧にともなう立会の要請が連日あった。

一方、国土交通省がおこなう第一次大極殿院の復原整備に向けて、奈良時代の大極殿院の建物、すなわち、大極殿院南門、東西楼、南北面・東西面の築地回廊、内庭部の様相について、平成13・14年度におこなった研究成果を吟味しつつ、その後の発掘調査成果を加味して復原原案作成のための資料収集をおこなった。これにともなう所内の復原検討会を2010年度に計13回実施し、史料・考古・建築などの各資料から検討した。東西楼をはじめとする特異な遺構の上部構造、あるいは日本にはほとんど現存しない宮殿の空間を理解し、復原するためには、日本国内にとどまらず東アジアの古代都城や現存建築を視野に入れる必要がある。そのために中国・韓国における発掘例についてもできる限り検討を加え、類例建築調査もおこなった。また国土交通省が開催した「第一次大極殿院建造物復原整備検討委員会」にオブザーバーとして参加し、上記の検討成果を報告した。

（箱崎 和久）



復原検討会風景（第3回 2010年9月10日）

●高松塚古墳壁画の保存修復のための材料調査

高松塚古墳壁画は、国営飛鳥歴史公園内に設置された仮設修理施設において、現在、クリーニングなどの作業がおこなわれている。壁画の保存修理においては、石材、漆喰および彩色材料などに対する調査をおこない、その材質、劣化状態および劣化原因に関する情報を得ることが重要である。

本年度は、劣化原因調査および修復のための継続的な材料調査として、西壁と閉塞石に対して蛍光X線元素分析を実施し、鉛の面的な分布状況を調査した。また、壁画面上での分析時に利用する機器固定ステージの改良をおこない、可視分光分析、近赤外分光分析およびテラヘルツ分光イメージングによる調査を実施できるようにした。一方、今後の経年変化の基礎データを得るために、改造したデジタルアーカイブスキャナを使用して、東壁、西壁、奥壁および天井の高精細データならびに赤外面像を取得した。また、紫外線蛍光画像を撮影するための開発実験をおこない、紫外線蛍光画像の取得も可能な状態とした。漆喰の分析調査では目地漆喰の微量成分分析、偏光顕微鏡観察、電子顕微鏡観察をおこなった。

石室石材の修理としては、石室石材の接合・補填法の検討、安定台の改良製作（天井石1、2）ならびに天井石3の亀裂部側面支持サポートの製作をおこなった。

以上の他、『国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策事業報告書』資料編：発掘調査（原案）の執筆ならびに編集、石室石材の細部三次元計測、発掘調査3D計測による石室解体事業のCG動画作成、発掘調査および解体作業中に撮影した記録映像の編集作業、遺構図のデジタルトレース作業、石室石材上に残存する朱線の材質分析、版築土の粒度分析調査などを実施した。

（高妻 洋成）



高松塚修理施設におけるデジタルアーカイブスキャナを用いた壁画のスキャン

●キトラ古墳出土遺物等の調査研究

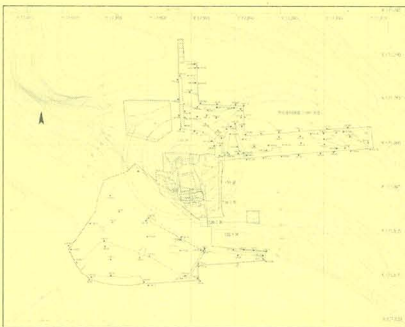
キトラ古墳関係の事業では、発掘調査により出土した遺物の分析調査および展示活用、墳丘整備のための作業を実施した。

分析調査では、鉄製遺物の繊維痕跡に、平織の部分と三つ編み状（三つ組）の部分があることを確認した。撚りなどの特徴から、平織は平絹と推測される。三つ組は平絹と比べかなり太く、植物繊維をまとめているように観察できるものの、残存する部分が少なく判然としなかった。

展示活用については、フォトマップ資料のショートバージョンのブルーレイディスクプレス作業、および印刷製本等を実施した。これはキトラ古墳壁画の取り外し前（2004年3月）の石室内の三次元測量とフォトマップの手法を用いた壁画の高精細デジタルカメラ撮影資料で、壁画を原寸大で高精度印刷して収録する等、石室内の壁画の全容を後世に伝える唯一の正確な記録資料とも言える。この本にはブルーレイハイビジョン動画「キトラ古墳壁画2004」を添付し、石室内にいるような臨場感を与え、キトラ古墳壁画を理解する上で貴重な資料となった。

今後予定されている墳丘の整備に関しては、基礎的な検討から開始した。キトラ古墳の検出遺構に関しては、『特別史跡キトラ古墳発掘調査報告』で遺構図を集成する形で呈示していたが、これまでの数次にわたる発掘調査成果を総合する形で、標高の入った遺構編集図を作成した。また、実際の整備案の参考とするために墳丘の復原案に関する検討会を開催し、復原案を作製した。

（玉田 芳英）



キトラ古墳発掘調査検出遺構集成図

発掘調査現地説明会・見学会

◆2010年4月17日(土)

平城第466次(平城宮東方官衙地区)

発掘調査現地説明会

都城発掘調査部(平城地区)

考古第一研究室 国武 貞克

参加者人数:750人

調査面積 約666㎡

◆2010年7月3日(土)

飛鳥藤原第163次(藤原宮朝堂院)

発掘調査現地説明会

都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)

考古第三研究室 森先 一貴

参加者数:423人

調査面積 1,500㎡

◆2010年7月17日(土)

平城第469次(平城宮跡東院地区西北部)

発掘調査現地説明会

都城発掘調査部(平城地区)

考古第一研究室 芝 康次郎

参加者数:950人

調査面積 約850㎡

◆2010年12月5日(日)

飛鳥藤原第165次調査(水落遺跡)

現地見学会

都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)

参加者数:1420人

調査面積 約287㎡

◆2010年12月17日~21日

平城第477次(春日東塔院)

現地見学会

都城発掘調査部(平城地区)

参加者数:300人

調査面積 219㎡



発掘調査現地説明会の様子

2 研修・指導と教育

埋蔵文化財担当者研修と指導

埋蔵文化財の保護・活用を推進し、国民に対するサービスの向上をはかるため、地方公共団体等の埋蔵文化財担当職員の資質向上を目的とする研修を実施している。2010年度は、専門研修11課程を実施した(2009年度埋蔵文化財担当者研修課程の一覧参照)。研修の多くは、講義形式が主体であるが、研修後の感想文等によると、実地踏査や実技・実習を取り入れた研修が好評であった。研修総日数108日、研修生総数137名であった。

埋蔵文化財センターおよび各研究部では、要請にしたがって地方公共団体や関係機関が実施する発掘調査、出土遺物の保存修理、遺跡の保存、遺跡整備等に関して、指導および助言等の協力をおこなっている。2010年度の主な協力について一覧を別表に掲載した。このほか、文化庁、各公共団体、関係機関からの依頼を受けて、発掘調査をはじめ、遺跡・遺物の保存、遺跡の整備および公開に関する調査、地下遺構の探査、動物遺存体分析、年輪年代測定などの共同研究や受託研究も進めている。

京都大学(大学院)との連携教育

京都大学大学院人間・環境学研究科共生文明学専攻一文化・地域環境論講座の文化遺産学分野の客員教員として大河内隆之(年輪年代学論)・小澤毅(遺跡調査法論)・小野健吉(庭園文化論)・高妻洋成(保存科

学論)・清水重敦(文化的景観論)・松井章(環境考古学論)ら6名がそれぞれの講義を担当し、全員が文化遺産学演習や共生文明学特別講義を担当した。

授業では、各教員の専門である年輪年代学、都城・寺院を対象とした歴史考古学、庭園史学、保存科学、文化的景観学、環境考古学等の講義・演習・実習等をおこない、また文化遺産学を専攻する院生らは、授業以外にも主として奈文研で研究を行い、必要に応じて各教員が指導にあたった。2010年度に在籍した院生は、修士課程4名、博士後期課程4名(休学を含む)であった。

京都大学大学院人間・環境学研究科では、2010年度、松井章が主査をつとめる院生1名が人間・環境学博士号を授与された。京都大学との連携大学院教育において、院生が博士号を取得するのは4人目である。

奈良女子大学(大学院)との連携教育

奈良女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻文化史論講座の客員教員として、小池伸彦(客員教授)、次山淳(客員准教授)及び渡邊晃宏(客員教授)がそれぞれ、「文化財学の諸問題」、「歴史考古学特論」、「歴史資料論」を担当し、博士後期課程の大学院生の指導をおこなった。

いずれも、飛鳥地域、藤原宮・京跡、平城宮・京跡などの遺跡の発掘調査、埴塼や羽口、木製品、木簡をはじめとする遺物の調査研究に密着した授業であり、大学における通常の授業では経験できない、奈文研ならではの特色ある教育を実践した。

2010年度 日本各地の遺跡・建造物等に関する指導・協力一覧 (委員の委嘱を受けているもの)

(青森) 三内丸山遺跡 縄文遺跡群	(京都) 恭仁宮跡 宇治川太閤堤遺跡	(岡山) 第二次山陽遺跡 備中松山城跡 造山古墳
(秋田) 胡桃館遺跡	(大阪) 新堂廃寺等 百濟寺跡 鳥坂寺跡	(山口) 下関市史跡
(岩手) 志波城跡 平泉遺跡群	(兵庫) 法隆寺領播磨国鶴荘史跡 和田岬砲台	(徳島) 阿波国分尼寺跡 藍住町勝端城館跡 徳島県近代和風建築
(宮城) 多賀城跡	姫路城跡	(香川) 屋嶋城跡 中寺廃寺跡
(福島) 宮畑遺跡	(奈良) 旧大乘院庭園 平城京左京三条二坊宮跡	(愛媛) 久米官衙遺跡群
(栃木) 上神主・茂原官衙遺跡 長者ヶ平官衙遺跡	庭園中宮寺跡 菓山古墳 橿原市伝統的建造物群	(福岡) 大宰府史跡 鴻臚館跡 三雲・井原遺跡
附東山道跡 高原山黒曜石原産地遺跡群	大安寺旧境内 薬師寺東塔 唐古・鍵遺跡	(長崎) 原の辻遺跡 鷹島海底遺跡 端島炭坑
下野国分寺跡	宇陀市松山地区伝統的建造物群	(宮崎) 日向国府跡
(長野) 柳沢遺跡	五條市伝統的建造物群 菖蒲池古墳	
(静岡) 新居関跡 遠江国分寺跡	(和歌山) 紀伊山地の霊場と参詣道	
(富山) 加賀藩主前田家墓所	(鳥取) 妻木晩田遺跡 伯耆古代の丘 栃木廃寺跡	
(愛知) 本光寺 名古屋城跡	青谷上寺地遺跡 浦富海岸	
(三重) 斎宮跡 伊勢国分寺跡	(鳥根) 山陰道(野坂峠・徳城峠越)	
(滋賀) 大津市伝統的建造物群 慶雲館庭園	(広島) 安芸国分寺跡 二子塚古墳	

2010年度 埋蔵文化財担当者研修課程一覧

区分	課 程	実施期日	定員	対象	内容	担当室	研修日数	応募者数	受講者数
専 門 研 修	建築遺構 調査課程	6月14日 ～ 6月18日	12名	地域の中核となる地方 公共団体の埋蔵文化 財担当職員若しくはこ れに準ずる者	建築遺構の調査に関して必要 な専門的知識と技術の研修	遺構研究室	5日	16名	16名
	文化財写真Ⅰ (基礎)課程	7月6日 ～ 7月22日	10名	〃	埋蔵文化財調査における写 真業務のうち、高品質な写真 資料作成に必要な知識と観 察眼を白黒暗室処理実習を 中心に習得する研修	写真室	17日	2名	中止
	文化財写真Ⅱ (応用)課程	7月22日 ～ 8月5日	10名	〃	埋蔵文化財調査における写 真業務のうち、撮影から写真 プリント制作までの実習を通 して資料写真制作に必要な 知識と技術を習得する研修	写真室	15日	1名	中止
	古代・中近世 瓦調査課程	9月1日 ～ 9月7日	15名	〃	古代・中近世遺跡出土土瓦の調 査研究に関して必要な専門的 知識と技術の研修	考古第三研究室	7日	18名	18名
	三次元計測 課程	9月27日 ～ 10月1日	10名	〃	古代遺跡出土中国・日本陶磁 器の調査研究に関して必要な 専門的知識と技術の研修	遺跡・調査技術 研究室	5日	12名	11名
	保存科学Ⅰ (無機質遺物)課程	10月6日 ～ 10月15日	10名	〃	遺物・遺構の保存科学的な調 査法および保存修理に関する 基礎知識と技術の習得を目 指す研修	保存修復科学 研究室	10日	12名	12名
	保存科学Ⅱ (有機質遺物)課程	10月18日 ～ 10月26日	10名	〃	遺物・遺構の保存科学的な調 査法および保存修理に関する 基礎知識と技術の習得を目 指す研修	保存修復科学 研究室	9日	5名	5名
	遺跡地図 情報課程	11月16日 ～ 11月19日	16名	〃	埋蔵文化財の調査研究への GISの応用に関する基礎的 知識の研修	文化財情報研究室	4日	5名	5名
	自然科学的年 代決定法課程	11月29日 ～ 12月3日	12名	〃	年輪年代法とC14年代測定法 を中心とする、自然科学的手 法による年代測定に関する専 門的知識と技術の研修	年代学研究室	5日	5名	5名
	報告書 作成課程	12月9日 ～ 12月17日	16名	〃	見やすく読みやすい報告書の 作り方と、図録・学術誌編集の 基礎に関する研修	企画調整室	9日	26名	26名
	出土文字資料 調査課程	1月17日 ～ 1月21日	10名	〃	出土文字資料の調査研究に 関して必要な専門的知識と技 術の研修	史料研究室	5日	16名	15名
中近世城郭 調査整備課程	1月27日 ～ 2月3日	20名	〃	中近世城郭の調査研究と整 備に関して必要な専門的知識 の研修	景観研究室	8日	18名	18名	
生物環境 調査課程	2月15日 ～ 2月23日	12名	〃	環境考古学の基幹を構成す る生物環境分野の最新の研 究法と、その成果についての 専門的知識と技術の研修	環境考古学 研究室	9日	7名	6名	

3 展示と公開

飛鳥資料館の展示

◆春期特別展「キトラ古墳壁画四神」

2010年4月16日～6月13日

キトラ古墳壁画四神のうち、初公開となる朱雀に関する研究成果を紹介するとともに、これまで飛鳥資料館がおこなってきたキトラ古墳壁画に関する研究を総括した。また、5月15日から6月13日まで、白虎、玄武、青龍、朱雀の四神図すべてを特別公開した。5月30日には、明日香村中央公民館で文化庁とともに講演・討論会を開催した。

◆夏期企画展「小さな石器の大きな物語」

2010年7月16日～9月5日

奈文研の幅広い研究活動を広く公開するため、東アジアに広く分布する細石刃文化に関する最新の研究成果を紹介した。中国河南省文物考古研究所と国際共同研究を進めている河南省靈井遺跡の石器群の写真パネルほか、各地の機関より借用した細石刃資料を展示した。

◆秋期特別展「木簡黎明 - 飛鳥に集う いにしへの文字たち」

2010年10月16日～11月28日

本展覧会では、飛鳥地域の木簡を中心に、日本各地で出土した主な7世紀の木簡173点を展示し、木簡から垣間見えてくる古代律令国家の実態とその歩みについて紹介した。10月17日には奈良大学の寺崎保広教授による特別講演会「7世紀の木簡のおもしろさ」を開催したほか、10月23日、11月6日、11月20日には研究員によるギャラリートークをおこなった。

◆冬期企画展「飛鳥の考古学2010」

2011年1月28日～2月27日

例年恒例となった発掘調査速報展「飛鳥の考古学」を明日香村教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所とともに開催し、平成21年度の代表的な発掘調査の成果を最新の出土品とともに紹介した。

2010年度 入館者数

飛鳥資料館(有料)*観覧料の詳細は61頁	133,312人
平城宮跡資料館(無料)	354,346人
合計	487,658人

平城宮跡資料館の展示

平城宮跡資料館は、2010年4月24日にリニューアルオープンした。2010年度は、下記の4つの企画展を開催した。

◆夏期企画展「平城宮跡 今・昔 - 岡田庄三写真展 -」

2010年7月10日～8月31日

リニューアル後初の企画展。

平城宮跡を半世紀以上にわたり撮影してこられた地元佐紀町在住の写真家岡田庄三氏の写真展で、昭和30年代の平城宮跡の写真と、同じ場所から撮影された現在の写真をならべて展示した。

◆秋期特別展「天平びとの声をきく - 地下の正倉院・平城宮 木簡のすべて」

2010年9月25日～11月7日

研究所の平城宮跡発掘調査50周年を記念して開催した特別展で、平城宮・京で出土した木簡合計300点余りを展示した。記念講演会(10/9)・ギャラリートーク(10/3, 17, 31)を実施した。



秋期特別展のようす

◆冬期企画展「測る、知る、伝える - 平城京と文化財 -」

2010年11月26日～2011年1月7日

国土地理院近畿地方測量部の呼びかけで合同主催が実現した、地理と測量の観点から平城京や文化財を読み解く企画展である。記念講演会(12/19)や同時イベントとして奈良県測量設計業協会による野外測量体験も開催された。

◆春期企画展「発掘速報展 平城 2009・2010」

2011年2月19日～2011年5月8日

奈良文化財研究所が2009・2010年度に発掘した平城宮・京内の9遺跡を中心に、調査の過程・成果を紹介する企画展。毎週金曜日には発掘調査担当者によるギャラリートークを開催した。

解説ボランティア事業

平城宮跡への来訪者に対して案内・解説をおこなう「平城宮跡解説ボランティア」事業を1999年10月から実施している。2011年3月31日現在、所定の研修を受けた解説ボランティアの登録数は182名を数え、平均して一人当たり1ヶ月に2～3日のガイド活動をおこなっている。

2010年度における活動は、「平城遷都1300年事業」の平城宮跡探訪ツアーのひとつ定点ガイド（宮跡内6定点での定時・随時ガイド）として参加協力したこと

が特筆すべきことである。事業期間中（4/24～11/7の198日間）には、のべ297,976人の来訪者を案内した。その間に活動したボランティアガイドのべ数は、2,765人だった。（平均してガイド一人当たり期間中に108人を案内したことになる。）

奈良文化財研究所としては、平城宮跡を広く一般に理解してもらうために、その案内・解説を「平城宮跡解説ボランティア」を通じておこない、その連続する活動を可能にするために、研修機会等の積極的な提供支援をおこなった。

また、平城宮跡内で従来の定点ガイド以外にも、同行移動するツアーガイドの試行も実施した。

平城遷都1300年記念事業198日間（平城宮跡会場）における「平城宮跡解説ボランティア」の活動状況

(2010.4.24～11.7)

各定点において解説を受けた来訪者のべ人数							解説をした平城宮跡解説ボランティアの延べ人数
平城宮跡資料館	第一次大極殿	遺構展示館	朱雀門	東院庭園	発掘調査現場	計	
63,232人	71,688人	36,912人	72,828人	44,215人	9,101人	297,976人	2,765人

平城宮跡会場来訪者総数 3,631,700人

*発掘現場は、この事業期間中に特別に設置した定点である。

図書資料・データベースの公開

〈図書〉

図書資料室では、文化財資料の中核的な拠点となるべく、歴史・考古学分野をはじめ、巾広く文化財関係の書籍および写真資料を収集している。また、本庁舎図書資料室は一般公開施設と位置づけて公開しており、所外の研究者および一般の方々に図書・雑誌及び展覧会カタログ等の閲覧・複写のサービスをおこなっている。遠隔利用については、国立情報学研究所の提供するNACSIS-ILLを通じて複写サービスを実施している。

また、研究所の刊行物についても、機関リポジトリを作成し、画像データとしてインターネット公開をおこなっている。

〈データベース〉

本研究所では、文化財情報の電子化をおこない、文化財関係の各種データベースを継続的に作成している。公開するデータベースは全てWebブラウザでの検索及び閲覧が可能で、2010年度は13万6千件のアクセスを得ている。

公開データベース一覧	2010年度 アクセス件数
木簡データベース	24,637
木簡画像データベース【木簡字典】	26,317
全国木簡出土遺跡・報告書データベース	976
軒瓦データベース	1,655
遺跡データベース	15,054
地方官衙関係遺跡データベース	1,557
古代寺院遺跡データベース	1,405
官衙関係遺跡整備データベース	985
斜面保護データベース	842
発掘庭園データベース	1,357
Archaeologically Excavated Japanese Gardens	1,019
OPAC（所蔵図書データベース）	29,717
報告書抄録データベース	6,758
薬師寺典籍文書データベース	1,016
大宮家文書データベース	406
学術情報リポジトリ	23,097
合計	136,798

4 その他

刊行物

奈良文化財研究所学報

- 第1冊 仏師運慶の研究(1954)
 第2冊 修学院離宮の復原的研究(1954)
 第3冊 文化史論叢(1955)
 第4冊 奈良時代僧房の研究(1956)
 第5冊 飛鳥寺発掘調査報告(1957)
 第6冊 中世庭園文化史(1958)
 第7冊 興福寺食堂発掘調査報告(1958)
 第8冊 文化財論叢 I (1959)
 第9冊 川原寺発掘調査報告(1959)
 第10冊 平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告(1960)
 第11冊 院の御所と御堂－院家建築の研究－(1961)
 第12冊 巧匠安阿弥陀仏快慶(1962)
 第13冊 寝殿造系庭園の立地的考察(1962)
 第14冊 唐招提寺蔵「レース」と「金亀舍利塔」に関する研究(1962)
 第15冊 平城宮発掘調査報告Ⅱ
官衙地域の調査(1962)
 第16冊 平城宮発掘調査報告Ⅲ
内裏地域の調査(1963)
 第17冊 平城宮発掘調査報告Ⅳ
官衙地域の調査 2 (1965)
 第18冊 小堀遠州の作事(1965)
 第19冊 藤原氏の氏寺とその院家(1967)
 第20冊 名物裂の成立(1969)
 第21冊 研究論集 I (1971)
 第22冊 研究論集 II (1973)
 第23冊 平城宮発掘調査報告
平城京左京一条三坊の調査(1974)
 第24冊 高山－町並調査報告－(1974)
 第25冊 平城京左京三条二坊(1975)
 第26冊 平城宮発掘調査報告
内裏北外郭の調査(1975)
 第27冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅶ(1975)
 第28冊 研究論集Ⅲ(1975)
 第29冊 木曾奈良井－町並調査報告－(1975)
 第30冊 五條－町並調査の記録－(1976)
 第31冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ(1977)
 第32冊 研究論集Ⅳ(1977)
 第33冊 イタリア中部の一山岳集落における民家調査報告(1977)
 第34冊 平城宮発掘調査報告Ⅹ
宮城門・大垣の調査(1977)
 第35冊 研究論集Ⅴ(1978)
 第36冊 平城宮整備調査報告Ⅰ(1978)
 第37冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ(1979)
 第38冊 研究論集Ⅵ(1979)
 第39冊 平城宮発掘調査報告Ⅹ
古墳時代Ⅰ(1980)
 第40冊 平城宮発掘調査報告Ⅺ
第一次大極殿地域の調査(1981)
 第41冊 研究論集Ⅶ(1984)
 第42冊 平城宮発掘調査報告Ⅻ
馬寮地域の調査(1984)
 第43冊 日本における近世民家(農家)の系統的発展(1984)
 第44冊 平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告(1985)
 第45冊 薬師寺発掘調査報告(1986)
 第46冊 平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書(1988)
 第47冊 研究論集Ⅷ(1988)
 第48冊 年輪に歴史を読む
－日本における古年輪学の成立－(1990)
 第49冊 研究論集Ⅸ(1990)
 第50冊 平城宮跡発掘調査報告書Ⅻ
内裏の調査Ⅱ(1990)
 第51冊 平城宮跡発掘調査報告書Ⅺ
平城宮第二次大極殿院の調査(1992)
 第52冊 西隆寺発掘調査報告書(1992)
 第53冊 平城宮朱雀門の復原的研究(1993)
 第54冊 平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告
－長屋王邸・藤原麻呂邸の調査－(1994)
 第55冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ
－飛鳥水落遺跡の調査－(1994)
 第56冊 平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告(1997)
 第57冊 日本の信仰遺跡(1998)
 第58冊 研究論集Ⅹ(1999)
 第59冊 中世瓦の研究(1999)
 第60冊 研究論集Ⅺ(1999)
 第61冊 研究論集Ⅻ
長屋王家・二条大路木簡を読む(2000)
 第62冊 史跡頭塔発掘調査報告(2000)
 第63冊 山田寺発掘調査報告(2001)
 第64冊 研究論集Ⅻ
中国古代の葬玉(2001)

- 第65冊 文化財論叢Ⅲ 奈良文化財研究所
創立五十周年記念論文集(2002)
- 第66冊 研究論集Ⅳ
東アジアの古代都城(2002)
- 第67冊 平城京左京二条二坊十四坪発掘調査報告
旧石器時代編[法華寺南遺跡](2002)
- 第68冊 吉備池廃寺発掘調査報告
百済大寺跡の調査(2002)
- 第69冊 平城宮発掘調査報告Ⅴ
東院庭園地区の調査(2002)
- 第70冊 平城宮発掘調査報告Ⅵ
兵部省地区の調査(2004)
- 第71冊 飛鳥池遺跡発掘調査報告(2004)
- 第72冊 奈良山発掘調査報告Ⅰ
石のカラト古墳・音乗谷古墳の調査(2004)
- 第73冊 タニ窯跡群A 6号窯発掘調査報告書
-アンコール文化遺産保護共同研究報告集-(2004)
- 第74冊 古代庭園研究Ⅰ(2005)
- 第75冊 研究論集Ⅴ
中国古代の銅剣(2006)
- 第76冊 法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告(2006)
- 第77冊 日韓文化財論集Ⅰ(2007)
- 第78冊 近世瓦の研究(2008)
- 第79冊 平城宮第一次大極殿研究1 基壇・礎石編(2008)
- 第80冊 平城宮第一次大極殿研究4 瓦・屋根編(2008)
- 第81冊 平城宮第一次大極殿研究2 木部(2010)
- 第82冊 平城宮第一次大極殿研究3 彩色・金具(2009)
- 第83冊 研究論集Ⅵ
鉄製武器の流通と初期国家系形成(2009)
- 第84冊 平城宮発掘調査報告Ⅶ
第一次大極殿院地区の調査(2010)
- 第85冊 漢長安城桂宮(2010)
- 第86冊 研究論集Ⅶ
平安時代庭園の研究(2010)
- 第87冊 日韓文化財論集Ⅱ(2010)
- 第88冊 西トップ遺跡調査報告書(2010)
- 第89冊 四万十川流域 文化財的景観研究(2010)
- 奈良文化財研究所史料**
- 第1冊 南無阿弥陀仏作善集(複製)(1951)
- 第2冊 西大寺叡尊伝記集成(1953)
- 第3冊 仁和寺史料 寺誌編一(1963)
- 第4冊 俊乗房重源史料集成(1964)
- 第5冊 平城宮木簡一 図版・解説(1966・1969)
(平城宮発掘調査報告Ⅴ)
- 第6冊 仁和寺史料 寺誌編二(1967)
- 第7冊 唐招提寺史料第一(1970)
- 第8冊 平城宮木簡二 図版・解説(1974・1975)
(平城宮発掘調査報告Ⅷ)
- 第9冊 日本美術院彫刻等修理記録Ⅰ(1974)
- 第10冊 日本美術院彫刻等修理記録Ⅱ(1975)
- 第11冊 日本美術院彫刻等修理記録Ⅲ(1976)
- 第12冊 藤原宮木簡一 図版・解説(1977)
- 第13冊 日本美術院彫刻等修理記録Ⅳ(1977)
- 第14冊 日本美術院彫刻等修理記録Ⅴ(1978)
- 第15冊 東大寺文書目録第一巻(1978)
- 第16冊 日本美術院彫刻等修理記録(1979)
- 第17冊 平城宮木簡三 図版・解説(1979)
- 第18冊 藤原宮木簡二 図版・解説(1979)
- 第19冊 東大寺文書目録第二巻(1979)
- 第20冊 日本美術院彫刻等修理記録(1980)
- 第21冊 東大寺文書目録第三巻(1980)
- 第22冊 七大寺巡礼私記(1981)
- 第23冊 東大寺文書目録第四巻(1981)
- 第24冊 東大寺文書目録第五巻(1982)
- 第25冊 平城宮出土墨書土器集成Ⅰ(1982)
- 第26冊 東大寺文書目録第六巻(1983)
- 第27冊 木器集成図録-近畿古代編-(1984)
- 第28冊 平城宮木簡四 図版・解説(1985)
- 第29冊 興福寺典籍文書目録第1巻(1985)
- 第30冊 山内清男考古資料Ⅰ(1988)
- 第31冊 平城宮出土墨書土器集成Ⅱ(1988)
- 第32冊 山内清男考古資料2(1989)
- 第33冊 山内清男考古資料3(1991)
- 第34冊 山内清男考古資料4(1991)
- 第35冊 山内清男考古資料5(1991)
- 第36冊 木器集成図録-近畿原始編-(1992)
- 第37冊 梵鐘実測図集成(上)(1992)
- 第38冊 梵鐘実測図集成(下)(1993)
- 第39冊 山内清男考古資料6(1993)
- 第40冊 山田寺出土建築部材集成(1994)
- 第41冊 平城京木簡一-長屋王家木簡-(1994)
- 第42冊 平城宮木簡五 図版・解説(1995)
- 第43冊 山内清男考古資料7(1995)
- 第44冊 興福寺典籍文書目録第2巻(1995)
- 第45冊 北浦定政関係資料(1996)
- 第46冊 山内清男考古資料8(1996)
- 第47冊 北魏洛陽永寧寺(1997)
- 第48冊 発掘庭園資料(1997)
- 第49冊 山内清男考古資料9(1997)
- 第50冊 山内清男考古資料10(1998)
- 第51冊 山内清男考古資料11(1999)

- 第52冊 地域文化財の保存修復 考え方と方法(1999)
 第53冊 平城京木簡二－長屋王家木簡二－(2000)
 第54冊 山内清男考古資料12(2000)
 第55冊 法隆寺古絵図集(2001)
 第56冊 法隆寺考古資料(2001)
 第57冊 日中古代都城図録(2002)
 第58冊 山内清男考古資料13(2002)
 第59冊 平城宮出土墨書土器集成Ⅲ(2002)
 第60冊 平城京条坊総合地図(2002)
 第61冊 鞏義黄冶唐三彩(2002)
 第62冊 北浦定政関係資料 松の落ち葉(2002)
 第63冊 平城宮木簡六 図版・解説(2003)
 第64冊 平城京出土古代官銭集成Ⅰ(2003)
 第65冊 北浦定政関係資料 松の落ち葉二(2003)
 第66冊 山内清男考古資料14(2003)
 第67冊 興福寺典籍文書目録第3巻(2003)
 第68冊 古代東アジアの金属製容器Ⅰ 中国編(2003)
 第69冊 平城京漆紙文書一(2004)
 第70冊 山内清男考古資料15(2004)
 第71冊 古代東アジアの金属製容器Ⅱ 朝鮮・日本編(2004)
 第72冊 畿内産暗文土師器関連資料Ⅰ 西日本編(2004)
 第73冊 黄冶唐三彩窯の考古新発見(2005)
 第74冊 山内清男考古資料16(2005)
 第75冊 平城京木簡三－二条大路木簡一－(2005)
 第76冊 評制下荷札木簡集成(2005)
 第77冊 平城京出土陶硯集成Ⅰ(2005)
 第78冊 黒草紙・新黒双紙(2006)
 第79冊 飛鳥藤原京木簡一 図版・解説(2006)
 －飛鳥池・山田寺木簡－
 第80冊 平城京出土陶硯集成Ⅱ－平城京・寺院－(2006)
 第81冊 高松塚古墳フォトマップ資料集(2008)
 第82冊 飛鳥藤原京木簡二 図版・解説(2008)
 －藤原京木簡一－
 第83冊 興福寺典籍文書目録第四巻(2008)
 第84冊 山内清男考古資料17(2008)
 第85冊 平城宮木簡七 図版・解説(2009)
 第86冊 キトラ古墳壁画フォトマップ資料(2010)
 第87冊 明治時代平城宮跡保存運動史料集(2010)

奈良文化財研究所研究報告

- 第1冊 文化的景観研究集会(第1回)報告書(2009)
 第2冊 河南省鞏義市黄冶窯跡の発掘調査概報(2009)
 第3冊 古代東アジアの造瓦技術(2010)
 第4冊 官衙と門(資料・報告編)(2010)
 第5冊 文化的景観研究集会(第2回)報告書(2010)

奈良文化財研究所基準資料

- 第1冊 瓦編1 解説(1973)
 第2冊 瓦編2 解説(1974)
 第3冊 瓦編3 解説(1975)
 第4冊 瓦編4 解説(1976)
 第5冊 瓦編5 解説(1976)
 第6冊 瓦編6 解説(1978)
 第7冊 瓦編7 解説(1979)
 第8冊 瓦編8 解説(1980)
 第9冊 瓦編9 解説(1983)

飛鳥資料館図録

- 第1冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏(1976)
 第2冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏 銘文篇(1976)
 第3冊 日本古代の墓誌(1977)
 第4冊 日本古代の墓誌 銘文篇(1978)
 第5冊 古代の誕生仏(1978)
 第6冊 飛鳥時代の古墳(1979)
 第7冊 日本古代の鷓尾(1980)
 第8冊 山田寺展(1981)
 第9冊 高松塚拾年－壁画保存の歩み－(1982)
 第10冊 渡来人の寺－桧隈寺と坂田寺－(1983)
 第11冊 飛鳥の水時計(1983)
 第12冊 小建築の世界－埴輪から瓦塔まで－(1983)
 第13冊 藤原宮－半世紀にわたる調査と研究－(1984)
 第14冊 日本と韓国の塑像(1985)
 第15冊 飛鳥寺(1985)
 第16冊 飛鳥の石造物(1986)
 第17冊 萬葉乃衣食住(1986)
 第18冊 壬申の乱(1987)
 第19冊 古墳を科学する(1988)
 第20冊 聖徳太子の世界(1988)
 第21冊 仏舎利埋納(1989)
 第22冊 法隆寺金堂壁画飛天(1989)
 第23冊 日本書紀を掘る(1990)
 第24冊 飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察(1991)
 第25冊 飛鳥の源流(1991)
 第26冊 飛鳥の工房(1992)
 第27冊 古代の形 飛鳥藤原の文様を追う(1994)
 第28冊 蘇我三代(1995)
 第29冊 斉明紀(1996)
 第30冊 遺跡を測る(1997)
 第31冊 それからの飛鳥(1998)
 第32冊 UTAMAKURA(1998)
 第33冊 幻のおおでら－百済大寺(1999)
 第34冊 鏡を作る 海獣葡萄境を中心として(1999)

- 第35冊 あすかの石造物(2000)
 第36冊 飛鳥池遺跡(2000)
 第37冊 遺跡を探る(2001)
 第38冊 ‘あすかー以前’ (2002)
 第39冊 A O の記憶(2002)
 第40冊 古年輪(2003)
 第41冊 飛鳥の湯屋(2003)
 第42冊 古代の梵鐘(2004)
 第43冊 飛鳥の奥津城
 -キトラ・カラト・マルコ・高松塚。(2004)
 第44冊 東アジアの古代苑池(2005)
 第45冊 キトラ古墳と発掘された壁画たち(2006)
 第46冊 キトラ古墳壁画四神玄武(2007)
 第47冊 奇偉荘嚴 山田寺(2007)
 第48冊 キトラ古墳壁画十二支-子・丑・寅-(2007)
 第49冊 まぼろしの唐代精華
 -黄冶唐三彩窯の考古新発見-(2008)
 第50冊 キトラ古墳壁画四神-青龍白虎-(2009)
 第51冊 北方騎馬民族のかがやき-三燕文化の考古新
 発見-(2009)
 第52冊 キトラ古墳壁画四神(2009)
 第53冊 木簡黎明-飛鳥に集ういにしへの文字たち-(2010)
 第54冊 星々と日月の考古学(2010)

飛鳥資料館カタログ

- 第1冊 仏教伝来飛鳥への道(1975)
 第2冊 飛鳥の寺院遺跡1-最近の出土品-(1975)
 第3冊 明日香の仏像(1978)
 第4冊 桜井の仏像(1979)
 第5冊 高取の仏像(1980)
 第6冊 橿原の仏像(1981)
 第7冊 飛鳥の王陵(1982)
 第8冊 大官大寺-飛鳥最大の寺-(1985)
 第9冊 高松塚の新研究(1992)
 第10冊 飛鳥の一と-最近の調査から-(1994)
 第11冊 山田寺(1997)
 第12冊 山田寺東回廊再現(1997)
 第13冊 飛鳥のイメージ(2001)
 第14冊 古墳を飾る 音乗谷古墳の埴輪(2005)
 第15冊 うずもれた古文書
 -みやこの漆紙文書の世界-(2005)
 第16冊 飛鳥の金工-海獣葡萄鏡の諸相-(2006)
 第17冊 飛鳥の考古学2006(2006)
 第18冊 「とき」を撮す-発掘調査と写真-(2007)
 第19冊 飛鳥の考古学2007(2007)
 第20冊 飛鳥の考古学2008(2008)

- 第21冊 飛鳥の考古学2009(2009)
 第22冊 小さな石器の大きな物語
 第23冊 木簡黎明-飛鳥に集ういにしへの文字たち-(2010)
 第24冊 飛鳥の考古学2010(2010)

その他の刊行物(2010年度)

- 奈良文化財研究所紀要2010
 奈文研ニュースNo.37
 奈文研ニュースNo.38
 奈文研ニュースNo.39
 奈文研ニュースNo.40
 埋蔵文化財ニュースNo.142
 埋蔵文化財ニュースNo.143
 埋蔵文化財ニュースNo.144
 埋蔵文化財ニュースNo.145
 興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅴ
 図説平城京事典
 天平びとの声をきく-地下の正倉院・平城宮木簡のすべて-
 平城宮発掘出土木簡概報(四十)
 平成21年度遺跡整備・活用研究集会(第4回)報告書
 古代の玉-最新の保存科学的研究の動向-
 山木遺跡出土建築部材調査報告
 ニューズレター2号(西トップ寺院)
 ニューズレター3号(西トップ寺院)
 重要文化財建造物現状変更説明(1956~1958年)本文編・図版編
 ベトナム社会主義共和国トゥアティエン・フエ省フォック
 クティック村集落調査報告
 東アジア金属工芸史の研究13

※()内は発行年度

人事異動 (2010.4.1~2011.3.31)

●2010年4月1日付け

副所長 井上 和人
 研究支援推進部長 多 昭彦
 取・研究支援推進部連携推進課長
 研究支援推進部総務課長 紅林 孝彰
 兼・研究支援推進部研究支援課長
 研究支援推進部総務課課長補佐 廣中 保彦
 兼・総務課総務係長
 研究支援推進部総務課課長補佐 清水 尚
 研究支援推進部連携推進課課長補佐 田中 康成
 研究支援推進部連携推進課課長補佐 永井あつ子
 研究支援推進部研究支援課課長補佐 今西 康益
 研究支援推進部総務課専門職員(研修等担当) 宮本 隆行
 兼・研究支援課宮跡等活用支援係長
 研究支援推進部総務課会計係長 桑原 隆佳
 研究支援推進部総務課用度係長 柳生 弘和
 研究支援推進部総務課施設係長 志野愛由美
 研究支援推進部連携推進課経営戦略係長 江川 正
 研究支援推進部連携推進課広報企画係長 車井 俊也
 研究支援推進部連携推進課文化財情報係長 渡 勝弥
 研究支援推進部研究支援課専門職員 松本 正典
 (都城発掘調査部飛鳥・藤原地区担当)
 研究支援課専門職員(飛鳥資料館担当) 石田 義則
 研究支援推進部総務課総務係主任 高田 幸恵
 研究支援推進部総務課用度係 大村 尚江
 研究支援推進部連携推進課経営戦略係 三本松俊徳
 研究支援推進部研究支援課再雇用職員 飯田 信男
 企画調整部長 難波 洋三
 兼・企画調整部写真室長
 都城発掘調査部長 深澤 芳樹
 企画調整部展示企画室長 加藤 真二
 兼・飛鳥資料館学芸室長
 都城発掘調査部考古第一研究室長 小池 伸彦
 都城発掘調査部主任研究員 清野 孝之
 都城発掘調査部主任研究員 石橋 茂登
 都城発掘調査部主任研究員 神野 恵
 企画調整部写真室 栗山 雅夫
 埋蔵文化財センター保存修復科学研究室 田村 朋美
 兼・企画調整部国際遺跡研究室
 都城発掘調査部考古第二研究室アソシエイトフェロー 高橋 透
 都城発掘調査部考古第三研究室アソシエイトフェロー 石田由紀子
 埋蔵文化財センター年代学研究室アソシエイトフェロー 児島 大輔
 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課課長補佐 仁木 俊二

山口大学総務部総務課長 平石 憲良
 文化庁文化財部美術学芸課(考古資料部門)調査官 豊島 直博
 文化庁文化財部記念物課(埋蔵文化財部門)調査官 林 正憲

●2010年5月1日付け

文化遺産部遺跡整備研究室研究員 青木 達司

●2010年6月1日付け

研究支援推進部研究支援課課長補佐 大西 肇
 京都国立博物館総務課財務係長 石田 義則

●2010年8月1日付け

研究支援推進部総務課用度係長 米野 元則
 大阪大学財務部吹田調達センター室調達第二係長 柳生 弘和

●2010年9月30日付け

辞職 高田 貫太

●2010年10月1日付け

研究支援推進部連携推進課長 田中 康成
 都城発掘調査部考古第三研究室研究員 諫早 直人
 都城発掘調査部遺構研究室アソシエイトフェロー 井上 麻香
 都城発掘調査部遺構研究室アソシエイトフェロー 北山 夏希

●2010年11月1日付け

企画調整部国際遺跡研究室アソシエイトフェロー 田代亜紀子

●2011年1月1日付け

企画調整部展示企画室任期付研究員 森先奈々子
 文化遺産部歴史研究室任期付研究員 谷本 啓
 埋蔵文化財センター環境考古学研究室任期付研究員 菊地 大樹

●2011年3月16日付け

取・研究支援推進部総務課長 多 昭彦
 研究支援推進部研究支援課長 紅林 孝彰

●2011年3月31日付け

定年退職 井上 直夫
 辞職 次山 淳
 辞職 城倉 正祥

予算等

予算(予定額)

単位:千円

	2010年度	2011年度(予算額)
文部科学省からの運営費交付金(人件費を除く)	952,914	1,007,712 (特殊要因75,000含む)
施設整備費	0	0
自己収入(入場料等)	29,921	31,417
計	982,835	1,039,129

土地と建物

単位:㎡

	土地	建物(建面積/延面積)	建築年
本館地区	8,860.13	2,754.25/6,754.86	1964年他
平城宮跡資料館地区	※	10,630.53/16,149.67	1970年他
都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)	20,515.03	6016.41/9,477.43	1988年他
飛鳥資料館地区	17,092.93	2657.30/4,403.50	1974年他

※平城宮跡資料館地区の土地は文化庁所属の国有地を無償使用

科学研究費補助金(2011年4月12日現在)

単位:千円

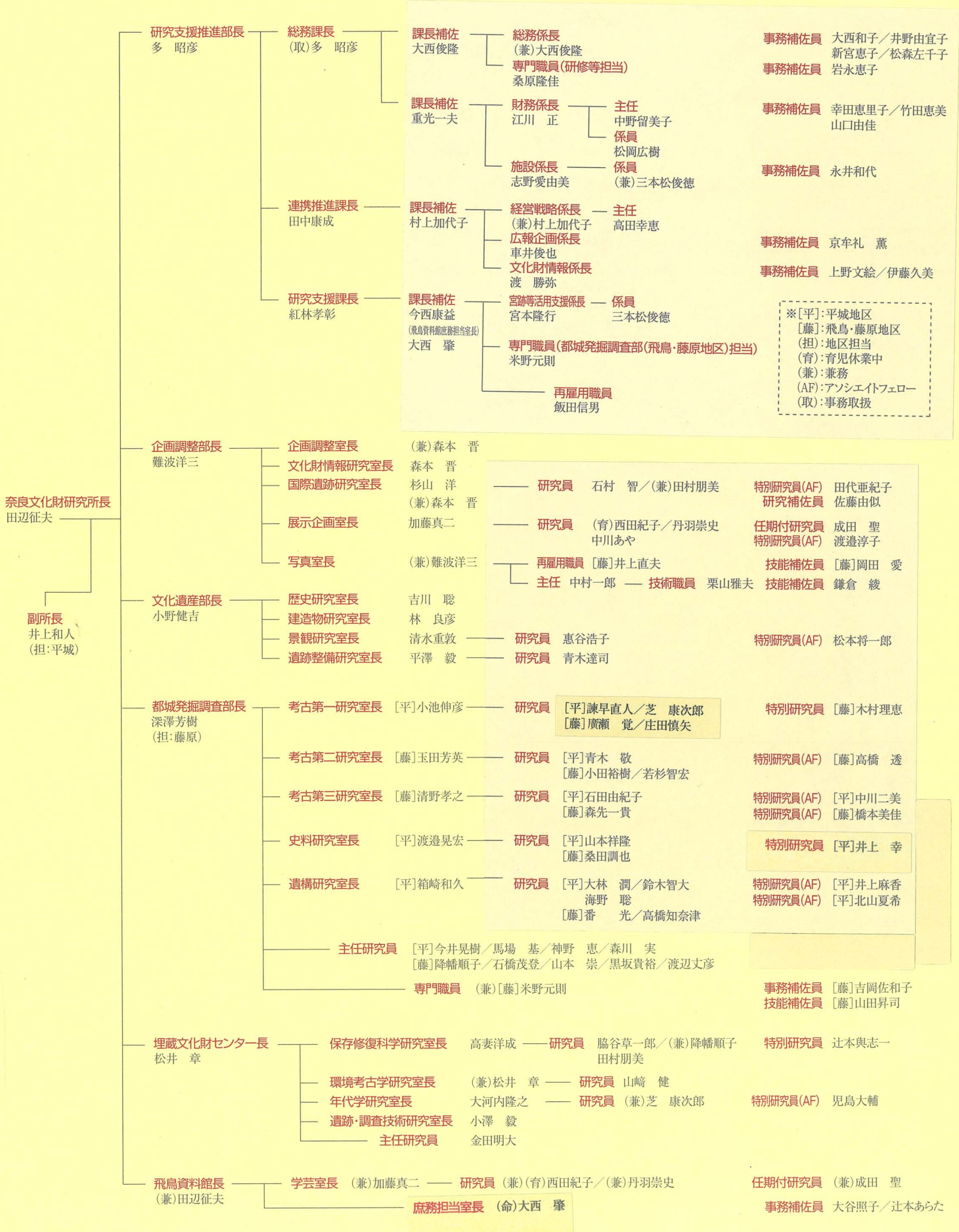
研究種目	2010年度		2011年度	
	件数	金額	件数	金額
基盤研究(S)	1	23,660	1	23,010
基盤研究(A)	2	21,840	2	19,500
基盤研究(B)	3	14,430	3	13,780
基盤研究(C)	6	5,980	7	6,890
若手研究(A)	0	—	1	1,430
若手研究(B)	21	20,085	14	11,570
研究活動スタート支援(若手研究(スタートアップ))	2	2,197	0	0
研究公開促進費(学術図書)	1	—	0	0

受託調査研究

単位:千円

区分	2009年度		2010年度	
	件数	金額	件数	金額
研究	20	206,688	24	187,996
発掘	6	48,880	9	51,141
計	26	255,568	33	239,137

職員一覧



※[平]:平城地区
 [藤]:飛鳥・藤原地区 (担):地区担当
 (育):育児休業中 (兼):兼務
 (AF):アソシエイトフェロー
 (取):事務取扱